

### 『資本論』の著述プランと利子・信用論

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

68

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

73

(終了ページ / End Page)

166

(発行年 / Year)

2000-07-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002716>

*Teinosuke Otani: Marx' Writing Plans of "Capital" and His Theories of Interest-Bearing Capital and Credit System.*  
 KEIZAI-SHIRIN (The Hosei University Economic Review), Vol. 68, No. 1,  
 Hosei University, Tokyo, Japan, 2000.

## 『資本論』の著述プランと利子・信用論

大谷 禎之介

### 目 次

はじめに

#### A 「経済学批判」体系プランにおける利子と信用

- (1) 「経済学批判」体系プランの成立
- (2) 「経済学批判」体系プランにおける利子
- (3) 「経済学批判」体系プランにおける信用

#### B 『1861-1863年草稿』における利子と信用

- (1) 「資本一般」への「多数資本」の導入
- (2) 『1861-1863年草稿』における利子生み資本
- (3) 『1861-1863年草稿』における貨幣取扱業

#### C 『資本論』における利子と信用

- (1) 「資本一般」から「資本の一般的分析」へ
- (2) 貨幣取扱資本と利子生み資本
- (3) 信用制度考察の必要とその可能性
- (4) 『資本論』における信用制度の考察

### はじめに

1983年夏に、『資本論体系』第6巻<sup>1)</sup>のために、同巻の編集者から与えられた「『経済学批判』体系プランと信用論」という論題のもとで、マル

1) 浜野俊一郎・深町郁彌編『資本論体系』第6巻、「利子・信用」、有斐閣、1985年。

クスの著書「経済学批判」の著述プランの変遷と関連させつつ、彼の利子生み資本論および信用制度論の形成史を概観した。この抽稿は、マルクスの利子生み資本論および信用制度論に関する筆者の一連の論稿のなかで、この分野にかかわる文献において最も多く論及され、あるいは引用されてきたものの一つである<sup>2)</sup>。けれども、筆者はかねてから、この抽稿をいま一度、新たな形態のもとで発表し直したいと考えてきた。

第1に、旧稿では、与えられた紙幅が限られていたために、典拠となるべきマルクスの記述のほとんどを、そのごく一部を抜き出して掲げるか、あるいは要約のかたちで挙げるにとどめざるをえなかった。しかし、この種のテーマの場合には、判断の根拠となるマルクスの記述を読者がその場で確認できることがきわめて重要である。いちいちもとの文献に当たって確かめてくださる読者は限られているであろう。その意味で、旧稿はかたちのうえできわめて不十分なものであった。

第2に、旧稿の執筆当時には、MEGA第2部のうち『1861-1863年草稿』を収める第3巻がようやく完結したところで、『資本論』第2部第1稿を収めた第4巻第1分冊も同第3部第1稿を収めた同第2分冊もまだ出ていなかった。旧稿で言及した『資本論』第2部第1稿については、邦訳作業のために手許にあった解説文により、同第3部第1稿については、アムステルダムの社会史国際研究所での筆者の調査によるほかはなかった。また、第2部第1稿は、その邦訳がすでに1982年に出ていたが、『1861-1863年草稿』の邦訳は、その第1-4分冊が『資本論草稿集』④～⑦として出ていただけで、抽稿で重要な意味をもっていた記述を含む第5分冊は未刊であった。その後、『資本論』第2部第1稿も同第3部第1稿も、前

2) この抽稿を戦後わが国のマルクス利子・信用論の研究史のなかに位置づけ、この観点から抽稿に一定の評価を加えられたものに、関根猪一郎「『資本論』第3部第5篇 研究の到達点」、『高知短期大学・社会科学論集』第51号、1986年、小野朝男「信用論の再構築に向けて——信用論研究の回顧と展望——」、『和歌山大学・経済理論』第253・261号、1993・1994年、関根猪一郎「わが国における『資本論』第3部研究——信用論を中心として——」、『90年代不況の性格』（経済理論学会年報第32集）、青木書店、1995年、所収がある。

者はMEGA第2部第4巻第1分冊、後者は同第2分冊で読むことができるようになり、また『1861-1863年草稿』の邦訳も『資本論草稿集』④～⑨として完結した。未刊の『資本論』第3部第1稿の邦訳を除けば——ただし問題の第5章（エンゲルス版第5篇）については、のちに注記するように、その大部分を一連の拙稿で読むことができる——、旧稿で筆者が利用したマルクスの文献のすべてを、原書でも邦訳でも見ることができるようになった。そこで、出典の表示にこれらの新しい版本によるものに変更し、読者が容易に参照できるようにしたいと考えていた。

第3に、旧稿の執筆後に、そこで書いた内容の一部に訂正すべき箇所が生まれていた。一つは、『1861-1863年草稿』の891-944ページ<sup>3)</sup>での利子生み資本にかんする記述を、旧稿では、それまでの一般的な解釈ならびにMEGA編集者の解釈にならって、「剰余価値に関する諸学説」の一部をなすもの、それもノート第14冊の表紙裏に書かれている内容目次の「挿論 収入とその源泉」に当たるものとしていたが、のちに三宅義夫氏の指摘<sup>4)</sup>によってこの判断が適当でないことに気づいた。

もう一つは、旧稿でも、『資本論』第3部第5章「5) 信用。架空資本」での記述について、「利子生み資本そのものの考察 [Betrachtung des *zinstragenden* Capitals als solchen]」<sup>5)</sup>がこの「5)」の「中心的部分をなすものと考えられる」（旧稿、272ページ）としており、この「5)」の対象は利子生み資本ではなくて信用制度である、とする三宅義夫氏の見解と異なることは明示してはいたが、それにもかかわらず、「事実上きわめて

3) 『資本論草稿集』⑦, 404-542ページ。

4) 三宅義夫「1861-1863年草稿とメガ編集の諸問題」、『マルクスの現代的探求』、八朔社、1992年、131-132ページ。三宅氏は、『マルクス信用論体系』（日本評論社、1970年）では、まだ当該部分を「剰余価値に関する諸学説」の一部と見なされており、新MEGAで『1861-1863年草稿』を見られてから、判断を変更されたのである。

5) 『資本論』第3部第1稿。MEGA<sup>®</sup> II/4.2, S. 505。拙稿「資本主義的生産における信用の役割」の草稿について、『経済志林』第52巻第3・4号、(44)ページ。[MEW, Bd. 25, S. 457.] 以下、第3部第1稿からの引用には、当該の草稿ページに当たる現行MEW版のページを〔 〕に入れて付記するが、草稿の記述がそのままのかたちで現行版に含まれているわけではない。

多角的に、しかもある程度はその動態において、信用制度を論じたものとなっている」(旧稿、273 ページ)と書くことによって、「5)」の対象は事実上は「信用制度と信用制度下の利子生み資本の諸形態」となっている、としていた<sup>6)</sup>。しかし、その後、この「5)」での記述を立ち入って検討するなかで、この部分は「事実上きわめて多角的に、しかもある程度はその動態において」信用制度に言及するものとなっはいても、信用制度そのものを論じたものと言うことはできない、ここでの主題ないし対象はあくまでも信用制度下の利子生み資本である貨幣資本 (monied capital) であって、信用制度そのものではない、そしてまた、そのことを強調することがきわめて重要だ、と考えるようになった。「5)」の対象は利子生み資本ではなくて信用制度である、とする三宅義夫氏の見解について言えば、それは、「5)」の対象は利子生み資本ではない、とする点で誤っているだけでなく、さらに「5)」の対象は信用制度である、とする点でも正しくないのであって、二重の意味で誤っているということになる。この拙見の変更は、既発表の拙稿のなかで事実上、あるいは明示的に述べていた<sup>7)</sup>。以上の2箇所を除けば旧稿の基本的な筋道はいまでも誤っていなかったと考えているので、この2箇所だけを訂正したかたちでもう一度旧稿を発表する機会をもちたいと考えてきた。

以上の3点について、旧稿に手を加えたものが本稿である。本稿では、上の第3点に関わる部分以外は旧稿に内容上の訂正を加えていない。考証の典拠であったマルクスの記述を、まとまったかたちで読めるだけの大きさをもった引用として付け加え<sup>8)</sup>、書記法上および体裁上の手入れを行ない、また本文中の注番号と注との関連を見やすくし、旧稿での出典ページの誤記を訂正するなど、形式上の手入れは行なったが、それ以外にはほと

6) 本稿における下線はマルクスによる強調、傍点は筆者による強調である。

7) 拙稿「『資本論』における信用の役割」、『信用理論研究』第3号、1986年、70ページ、および、拙稿「利子生み資本」の草稿について、『経済志林』第56巻第2号、1988年、6ページ、を見られたい。

8) これらの引用は、〔〕つき数字の通し番号をつけた稿末注に収めた。

んど書き換えも書き加えも行っていない。現時点で書き下ろした新稿としてではなく、かつての旧稿の新版ないし部分的改訂版として扱っていたのだと考へたからである。

なお、本稿で、旧稿の「『経済学批判』体系プランと信用論」というタイトルのうち、「『経済学批判』体系プラン」を「『資本論』の著述プラン」に、「信用論」を「利子・信用論」にそれぞれ変更した。その理由は次のとおりである。

まず、旧稿タイトル中の「『経済学批判』体系プラン」を「『資本論』の著述プラン」に変更した理由について。

マルクスの「『経済学批判』体系プラン」とマルクスの主著の「著述プラン」とは同じものではない。「『経済学批判』体系プラン」と言う場合に問われるのは、対象についての叙述がどのようなものであるべきか、それに基づいて全体をどのように篇別構成すべきか、ということである。マルクスについて言えば、1858年第1四半期に成立した「『経済学批判』プラン」は、まずもって、そのような「体系プラン」であった。これにたいして、筆者が「著述プラン」という語で考へているのは、マルクスが自分の手でこれから書き上げようとしている著作をどのようなものに仕上げようか、計画しているか、それをどのような篇別構成にしようか、計画しているか、という意味でのプランのことである。マルクスが上の「『経済学批判』体系プラン」を構想したときには、マルクスは実際にこのプランに基づいて彼の著書『経済学批判』を執筆しようとしていたのだから、この時点では「『経済学批判』体系プラン」が同時にまた彼の著書『経済学批判』の「著述プラン」でもあった。

しかし、その後マルクスは、「『経済学批判』体系」として構想したものを自身の手で全部書き上げることは不可能と判断し、かつて「『経済学批判』体系」では最初の、そして基幹的な対象であった「資本」に対象を絞って著書『資本〔Das Kapital〕』を書き上げること、著述することに専念する。この段階で彼が書き残しているプランの異文は、すべて、実際に著述を進

めるためのプラン、執筆プランである。

この「著述プラン」は、かつての「体系プラン」の構想は放棄されていなかったとしても、それと同じものであるとはかぎらない。現実には書き上げようとしているものが、かつての「体系プラン」の全体構想ではその最初の一部だけをなすものであった場合、それでも当初のプランに従い、いわば「未完」のかたちで終わらせるのか、それともそれなりに完結した一つの著作となるようににまとめるのか、選択肢にはいろいろありうるであろう。マルクスの場合、彼は明らかに『資本論』を「一つの芸術的な全体」に仕上げる道を選んだ。この場合、かりに「体系プラン」がほとんど変更されていなかったとしても、現実の「著述プラン」は「体系プラン」の最初の部分とまったく同一のものではありえないであろう。たとえば、『資本論』の場合で言えば、理論的な三つの部のあとに学説史のための最後の部が構想されていたが、この学説史は、当初『経済学批判』全体のあとに「経済的諸範疇および諸関係の発展の簡単な歴史的素描」として置こうとしていたものとは明らかに異なるものとならざるをえない。このように現実には仕上げようとしている著作がなにを対象としているのか、どのような意味で「一つの全体」をなすのか、ということによって、「著述プラン」は当然に「体系プラン」から一定の偏倚を示すことになる。

しかしまた、現実の「著述プラン」を練り上げていく過程で、当然に、全体構想としての「体系プラン」そのものの方法上の、またしたがって篇別構成上の欠陥ないし不十分な点に気づき、このような「体系プラン」上の修正によって「著述プラン」の変更が生じることもありうる。マルクスの1848年の「経済学批判」プランが成立するまでのプロセスを見ても、現に、1年も経たないわずかな期間のうちにさまざまのところにさまざまの変更が加えられていったのである。そうであったにもかかわらず、「経済学批判」体系プランがいったん成立したのちには、その後20年以上ももはやその細部にいたるまでまったくなんの変更も加えられる必要がなかったのだ、などと考えることができないのはあまりにも明らかではないであ

ろうか。マルクスが最晩年にいたるまで執筆を続けた『資本論』第2部についても、最後までその「著述プラン」のすべてを確定しきってはいなかったことが伺えるのである。

残念ながら、マルクス自身は、彼の経済学上の主著のさまざまな変遷を経ていった「著述プラン」の背後に彼がもっていたと考えられる「体系プラン」を、そのようなものとしてま・と・ま・つ・た・か・ち・で書き残すことをしていない。しかしそのような体系構想が「著述プラン」の背後に維持されていたことは、彼があちらこちらに残した、「枠外」に「属する」事柄についてのさまざまないわゆる「留保文言」によって推測できる。「経済学批判」体系プランは、『資本論』の「著述プラン」の背後にあってそれを根底において規定しているが、しかし体系構想としては『資本論』よりもはるかに広い射程をもつものである。このような意味でのプランとそれを規定している方法が把握されていなければ、『資本論』の外部に残されていて、マルクスが留保文言で言及している諸研究を「経済学批判」という大きな全体の一部をなすものとして体系的に把握することができないであろう<sup>9)</sup>。

こういうわけで、プランについて論じる場合には、「プラン」という語で、あるべき体系の構想としての「体系プラン」のことを考えているのか、それとも、現に書き上げようとしている著作の構想としての「著述プラン」のことなのか、ということをはっきりさせて議論しなければ、無用の混乱が生じることになるのである<sup>10)</sup>。従来、多くの場合、この点をあいまいにしたままで「経済学批判」プランについて議論されてきているように思わ

9) もっとも、「経済学批判」プランが『資本論』プランに変更された結果、後者の外部に残されているのは、もはや、それぞれ体系的にはなんの関連ももたないばらばらの個別研究だけだ、と考えるのであれば、このような問題意識は理解されようもないのであるが。

10) マルクスのプランを「著述プラン」として捉える必要を明示されたのは、三宅義夫氏であった。氏の論稿『『資本論』の体系と著述プラン』（『立教経済学研究』第8巻第2号、1954年、同第9巻第1号、1955年）のタイトルにある「著述プラン」という語がそれを端的に示している。しかし、氏の場合には、この論稿でものちの著書『マルクス信用論体系』でも、マルクスの「プラン」は総じて「著述プラン」として取り扱うべきだと考えられているだけであって、これとは区別されるべき「経済学批判」体系プランの存在も、またそれを把握する方法論的意義も意識されていない。

れる。旧稿でマルクスのプランを問題にするとき、まずなによりも、「体系プラン」かつ「著述プラン」として成立した「『経済学批判』体系プラン」から出発しなければならなかったが、しかしマルクスの著述の歩みを辿っていくときには、彼の現実の「著述プラン」に、最終的には『資本論』の「著述プラン」に密着しなければならなかった。この意味で、旧稿で「利子・信用論」について論じるさいの「プラン」とはなによりもマルクスの「著述プラン」であったのである。このことをはっきりさせるために、タイトル中の「『経済学批判』体系プラン」を『『資本論』の著述プラン』に変更した。

次に、旧稿タイトル中の「信用論」を「利子・信用論」に変更した理由について。

ごく普通に、「マルクス信用論」とか、あるいはそれを簡略化した「信用論」という語が使われているが、これはいったい、なにに関する「論」あるいは「理論」なのであろうか。それが、マルクスの「『経済学批判』体系」のなかの「諸資本の競争」のあとに予定されていた「信用」に関する理論に限定されていないことは明らかである。というのも、一般に、「マルクス信用論」と言われてきているものには、利子生み資本に関する理論、通俗的に言えば「利子論」が含まれているからである。そして、利子生み資本に関する理論と信用制度に関する理論とを区別して、その両者の関連を問題にする論者でも、これらの理論を一括して「信用論」と呼んでいるのだからである。

たとえば、「信用論」という語を書名にもつ、三宅義夫氏の『マルクス信用論体系』（日本評論社、1970年）をとってみよう。この書名がたんなる便宜によるものでなかったことは、「序文」での次の記述からも明らかである。

「前篇の第1論文「マルクス信用論の体系」自体が、当時『資本論』第3部第5篇でのマルクスの記述を整理し、その体系的構成を明らかにしようとしたものだったが、本書のその全体が、マルクスがその信

用論でなにをいっているか、なにを考えていたかを、たしかめ、明らかにしようとしているものであり、マルクス信用論研究のいわば基礎理論篇のようなものを成している。書名をマルクス信用論体系としたゆえんである。」(同書、2 ページ。強調一引用者、以下同様。)

そして、その「第1章 マルクス信用論の体系」の「一 序論」では、まず、「マルクスは『資本論』のなかで信用論を展開しているが、信用論はマルクスの経済学著述プランのなかでははじめどのように予定されていたか、それが『資本論』のさいにはどのように変わってきていたかについてまず考察しておこう」として、「1 信用論についてのマルクスの著述プラン」と「2 マルクスによる信用論の研究」を論じられている。ここで「信用論」というのが利子生み資本論を含んでいるものであることは言うまでもない。そして、「二 第3部第5篇の信用論の構成」では、冒頭で、「『資本論』第3部第5篇は大きく分けて二つの部分からなっており、第1の第21~24章では利子生み資本についての一般的な説明が与えられ、第2の第25章以下で信用制度が論じられている」(同書、26 ページ)とされている。

そうだとすると、このあとの本論には当然に、「第1の部分」と「第2の部分」との両者について述べられているものと予想されるのであるが、実際にはこの「二」の本論で論じられているのは、「第2の部分」すなわち第25章以降の部分についてだけなのである。これは、冒頭の「まえがき」のところで「第1の部分」について、とりわけ「利子生み資本と信用制度とはどのような関係に立っているのか」ということを述べておいたので、論述を省いたとも考えられそうである。ところが、同じ本論の末尾で、「以上、第5篇で展開されている信用論の序章的部分をなす第25章の記述を中心として、それと後続諸章において——部分的には貨幣論などにおいて——取扱われている諸問題との関連、それらの諸問題の輪郭、それら諸問題間の関連などについて、ひとまずその概略をしるした」(同書、77 ページ)と明記されているところを見ると、氏がこの本論で取り扱うマルクス

の「信用論」とはもともと第25章以降のことであったことがわかる。つまり、ここでは「第5篇で展開されている信用論」とは第25章以降の部分のことなのである。

それでは、本書『マルクス信用論体系』が「マルクス信用論」ということで意味しているのはこの第25章以降の部分のことかと言えば、本書の第9章に『資本論』における利子論の意義が置かれていることから明らかなように、この『マルクス信用論体系』には「第21～24章での利子、利子生み資本論」（同書、285ページ）も含まれているのである。

このように、三宅氏にとっては「信用論」とは、あるときはマルクスの利子および信用に関する理論の全体を指すものであり、あるときは信用制度が論じられている——と氏が考えられている——第25章以降でのマルクスの理論を指しているのである。さらに、三宅氏は『資本論』の外にはなお本来の「信用制度」論が残されていると考えておられるのであるから、これを含む「論」の全体を「信用論」と呼ぶことも必要となり、事態はさらにややこしいことになる。このようなことになっているのは、氏が、ある対象について論じる或る領域の理論に「論」という語をつけて呼ぶことに、かなりルーズ、あるいは安易であられたためと考えられる。

「マルクス信用論」という語を、便宜的に、マルクスの利子や信用についての理論の全体を指すものとして使うことは許されるであろう。たとえば、「信用理論研究会」という学会の名称におけるそのように。しかし、マルクスの体系プランや著述プランを論じるさいにこの語を、なんの断りもなしにこうした便宜的な用法で使えば、混乱を招くのは必至であろう。筆者は、利子生み資本についてのマルクスの理論を「マルクス利子生み資本論」、信用についてのマルクスの理論を「マルクス信用論」、信用制度についてのマルクスの理論を「マルクス信用制度論」と呼んで区別すべきではないかと考えている。マルクスにとっては、「信用」と「信用システム [Kreditsystem]」と「信用制度 [Kreditwesen]」<sup>1)</sup>との三つの概念には相対的な区別があるが、それにもかかわらず、「信用」という語が

「信用システム」または「信用制度」の意味で使われていることも多く（その逆はない）、また「信用システム」という語が「信用制度」の意味で使われていることもある（その逆はない）ので、マルクスの書いている言葉それ自体で内容を一義的に確定することができるわけではないが、それにもかかわらず、この三つの概念に対応する客観的対象の区別は明確に存在するのであり、したがって概念としてもそれらを区別する必要がある、また区別することが有用なのである。利子生み資本を対象とする理論と信用制度を対象とする理論とを包括的に呼ぶときには、「利子生み資本・信用制度論」とでもするほかはないであろう<sup>11)</sup>。「利子生み資本と信用制度」を簡略化して「利子と信用」と呼ぶこともできるのであるであろうが、理論的に厳密に言えば、「利子生み資本論」の対象は、剰余価値の分岐形態である「利子」ではなくて資本の独自の形態である利子生み資本であり、「信用制度論」の対象は、貨幣に代わって流通する端緒的な「信用」をも含みうる「信用」一般ではなくて資本主義的生産のもとにおける最も人為的な産物である銀行・信用制度であろう。

以上のようなことを考えてきたので、本稿では、旧稿のタイトル中の「信用論」を——正確には「利子生み資本・信用制度論」とすべきところであるが、簡略化して——「利子・信用論」に変更した。

11) 本稿では、Kreditsystem（旧正字法ではCreditsystem）を「信用システム」、Kreditwesen（旧正字法ではCreditwesen）を「信用制度」と訳す。マルクスの草稿ではこの二語はおおむね使い分けられているが、エンゲルスが彼の版を編集するさいに、この両語をかなり多くの箇所に入れ替えたために、彼の版では両語の含意がすっかり見えなくなってしまっている。エンゲルス版を底本とする邦訳では、大月書店版の岡崎訳も新日本出版社版（旧版および新版）も、両語をともに「信用制度」と訳している。この両語を区別する意味については、拙稿「貨幣資本と現実資本」の草稿について、『経済志林』第64巻第4号、1997年、118-130ページを見られたい。

12) 貸借も信用関係なのだから利子生み資本も信用を含んでいるのだ、と考える論者であれば、利子生み資本を対象とする理論と信用制度を対象とする理論とを一つにして「信用論」という語で括ることがむしろ当然だと考えられるであろう。その是非についてここで論じる余裕はないが、ただ、利子生み資本の一般的概念を取り扱っている『資本論』第3部現行版第21-24章に、貸借によって生じる「信用」なるものについての言及が皆無であること、そしてこれにはそれなりの理論的な根拠があるのだということだけを指摘しておく。

## A 「経済学批判」体系プランにおける利子と信用

### (1) 「経済学批判」体系プランの成立

「経済学批判」の体系を、資本・土地所有・賃労働、の前半3部と、国家・外国貿易・世界市場、の後半3部とからなる全6部作とし、このうち「1. 資本」を「1. 資本一般」、「2. 競争」、「3. 信用」、「4. 株式資本」の4篇とするプランは、1858年第1四半期に確立した<sup>(1)(2)(3)(4)</sup>。別表に見られるように、「1. 資本一般」は、「商品」・「貨幣または単純な流通」の二つの「前章〔Vorchapter〕」と、「主章」である「資本」(または「資本一般」)とからなり、この「主章」は、「1. 資本の生産過程」、「2. 資本の流過程」、「3. 両過程の統一、または資本と利潤・利子」の3章からなるものであった。1859年6月に刊行された『経済学批判 第1冊』はこのうちの「前章」を含むだけであって、マルクスはその後もこのプランによって続篇を仕上げる努力を続けていった。本稿では以下、このプランを「「経済学批判」体系プラン」、略して「「批判」体系プラン」と呼ぶ。

別表のように、マルクスは「経済学批判序説」(1857年8月執筆)のなかの「3) 経済学の方法」の末尾に、この方法による5項目の篇別プランを記した<sup>(5)</sup>。このうち、3), 4), 5)の3項目は、ほとんどそのまま「批判」体系プランの後半3部となっていく。3)のなかの「国債」および「公信用」、4)のなかの「為替相場」の諸項目もそのまま「批判」体系プランのなかに維持されていったものと見られる。これにたいして、「1) 一般的抽象的諸規定」はこの諸規定の性格についての熟考を経て、前述の「前章」となり、続く2)は、具体化され練り上げられて、「批判」体系プランの前半3部となっていった。この2)では、利子はまだ項目としては姿を現していないが、「信用制度(私的)」という記載が、「公信用」から区別される「信用制度」をここで取り扱うことを明示していた。

「経済学批判要綱」(1857年10月～1858年5月執筆)を書き始めてほど

なく、マルクスはノート第2冊3ページに、5篇からなるプランを記したが、これはいわば「序説」プランへの補足的覚え書であって、2)の「生産の内的編制」についても新しいことを加えていない<sup>6)</sup>。これにたいして、そのあと同じノートに相次いで書かれた二つのプランでは、2)の内容が体系的に具体化されているだけでなく、この両プランのあいだでも改作の跡がよく見えて、「批判」体系プランの構成の理解に示唆を与えるところが大きい。そのうちの第1のもの（以下、「前者プラン」と呼ぶ）は、ノート第2冊18ページにみられるプラン<sup>7)</sup>であって、ここでは、さきの「生産の内的編制」が具体化されて、資本・土地所有・賃労働の3項目と、それらを総括するものとしての「諸価格の運動。3階級」との4項目となり、そのあとに国家・外国貿易・世界市場の3項目が置かれている。つまり、ここで事実上、前半3部と後半3部とからなる6部作構想が成立したのである。また、「資本」の内部が初めて体系的に構成され、そのなかに利子も信用も一定の位置を占めることになった。

これに続く第2のプラン<sup>8)</sup>（以下、「後者プラン」と呼ぶ）は、わずか4ページあとの22-23ページに書かれた。別表でみられるように、前者プランで表題がなかったⅠとⅡとが、後者プランで「一般性」と「特殊性」という表題を受け取り、これに対応して、前者でⅢ-Ⅳとされていた諸項目が「Ⅲ. 個別性」という項目に一括された。この後者プランは、その後確立した「批判」体系プランの骨格を明瞭に示すものとなっている。すなわち、「Ⅰ. 一般性」は「資本一般」となり、「Ⅱ. 特殊性」は「競争」となり、「Ⅲ. 個別性」は、はじめ「信用」および「株式資本」となるが、のちには「株式資本」も「信用」に吸収されて、「信用」という項目となっていくのである。

## (2) 「経済学批判」体系プランにおける利子

「要綱」にみられるさきの両プランのなかで、利子と信用とはどのような取り扱われることになっていたのか。まず、後者プランの1のなかの、

「経済学批判序説」プラン (MEGA® II/1.1, S. 43.)	ノート第2冊3ページのプラン (MEGA® II/1.1, S. 151-2.)	ノート第2冊18ページのプラン (MEGA® II/1.1, S. 187.)
<p>1) 一般的抽象的諸規定。</p> <p>2) ブルジョア社会の内的編制を形づくり、また基本的諸階級の基礎をなす諸範疇。資本。賃労働。土地所有。それら相互の連関。都市と農村。3大社会階級。これら階級間の交換。流通。 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">信用制度(私的)。</span></p>	<p>第1篇 交換価値、貨幣、価格が考察される。</p> <p>第2篇 生産の内的編制。</p>	<p>資本</p> <p>I.</p> <p>1) 資本の一般的概念。</p> <p>2) 資本の特殊性：流動資本、固定資本。(生活手段としての資本、原料としての資本、労働用具としての資本)。</p> <p>3) 貨幣としての資本。</p> <p>II.</p> <p>1) 資本の量。蓄積。</p> <p>2) 自己自身で測られた資本。利潤。利子。資本の価値、すなわち利子および利潤としての自己から区別された資本。</p> <p>3) 諸資本の流通。</p> <p>α) 資本と資本との交換。資本と収入との交換。資本と諸価格。</p> <p>β) 諸資本の競争。</p> <p>γ) 諸資本の集中。</p> <p>III. 信用としての資本。</p> <p>IV. 株式資本としての資本。</p> <p>V. 貨幣市場としての資本。</p> <p>VI. 富の源泉としての資本。資本家。</p>
<p>3) 国家の形態でのブルジョア社会の総括。それ自身への連関において考察されたそれ。「不生産的」諸階級。租税。 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">国債。公信用。</span>人口。植民地。移民。</p> <p>4) 生産の国際的關係。国際的分業。国際的交換。輸出入。 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">為替相場。</span></p> <p>5) 世界市場と恐慌。</p>	<p>第3篇 国家における総括。</p> <p>第4篇 国際的關係。</p> <p>第5篇 世界市場。</p>	<p>土地所有。</p> <p>賃労働。</p> <p>諸価格の運動。3階級。</p> <p>国家。国家とブルジョア社会。租税。<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">国債。</span>人口。植民地。外国貿易。<span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">為替相場。</span>国際的鑄貨としての貨幣。 <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">世界市場。</span></p>

## 成立と利子・信用論

ノート第2冊 22-23 ページのプラン (MEGA® II/1.1, S. 199-203.)	「経済学批判」体系プラン (諸資料から合成して作成)
<p>資本</p> <p>I. 一般性。</p> <p>1)</p> <p>a) 貨幣からの資本の生成。</p> <p>b) 資本と労働（他人の労働によって媒介された）。</p> <p>c) 資本の諸要素（生産物。原料。労働用具）。</p> <p>2) 資本の特殊化：a) 流動資本，固定資本，資本の循環。</p> <p>3) 資本の個別性：資本と利潤。資本と利子。利子および利潤としての自己から区別された，価値としての資本。</p>	<p>第1部 資本。</p> <p>第1篇 資本一般。</p> <p>(1) 商品。(価値。)</p> <p>(2) 貨幣または単純な流通。(貨幣。)</p> <p>(3) 資本。(資本一般。)</p> <p>1. 資本の生産過程。</p> <p>2. 資本の流過程。</p> <p>3. 両過程の統一，または資本と利潤・利子。</p> <p>資本と利潤。</p>
<p>II. 特殊性</p> <p>1) 諸資本の蓄積。</p> <p>2) 諸資本の競争。</p> <p>3) 諸資本の集中（資本の量的な，同時に質的に資本の大きさ与作用との尺度としての，区別。）</p> <p>III. 個別性</p> <p>1) 信用としての資本。</p> <p>2) 株式資本としての資本。</p> <p>3) 貨幣市場としての資本。</p>	<p>第2篇 競争（あるいは多数の資本の相互にたいする行動）。</p> <p>第3篇 信用（ここでは資本が個別的資本にたいして一般的要素として現われる）。</p> <p>第4篇 株式資本（最も完成した形態（共産主義に一転する）としての，同時にそのあらゆる矛盾を伴っているところの）。</p> <p>信用。</p>
<p>土地所有（地代）</p> <p>賃労働</p>	<p>第2部 土地所有。</p> <p>第3部 賃労働。</p> <p>第4部 国家。</p> <p>第5部 外国貿易。(国際貿易。)</p> <p>第6部 世界市場。</p>

「3) 資本の個別性。資本と利潤。資本と利子。利子および利潤としての自己から区別された、価値としての資本」を挙げねばならない。これが「批判」体系プランでは、「資本一般」のなかの、「3. 両過程の統一、または資本と利潤・利子」となり、のちには簡単に「資本と利潤」と呼ばれるようになるのである。「I. 一般性」ないし「資本一般」の草稿として書かれていった「要綱」では、その「3. 果実をもたらすものとしての資本。利子。利潤。(生産費、等。)」が上の3)となるはずのものであったが、この部分は「資本と利子」についてはほとんど筆が及ばないままに中断されているのであって、われわれは「要綱」のなかに散在する覚え書的な記述のなかから、これについての内容を推測しうるのみである。書かれていないということだけで、マルクスはまだ考えていなかった、あるいは書くつもりでなかった、と即断する愚にも、またその逆の読み過ぎにも注意をしながら、「要綱」のなかに上の項目の内容を探らなければならない。

まず、「3. 果実をもたらすものとしての資本。利子。利潤。(生産費、等。)」の部分の最終ページには、利子を利潤とともに論じる理由と、利潤から利子へと移行していく筋道とについて、大要次のように書かれている。

増分である利潤からこれを生みだすものとして区別される価値は、自己を増殖する価値、資本である。そして、利潤をもたらす資本の成立によって、貨幣はある率で利潤を生むという使用価値をもった商品として流通にはいることができるようになるのであり、こうして利子および利子生み資本が成立する。利子にたいする利子生み資本の関係は、自己を増殖する価値とその増分との関係としては、利潤にたいする利潤をもたらす資本の関係と等しいだけでなく、むしろ前者は、後者の「純粋に抽象的な形態」なのである<sup>(9) 13)</sup>。

だから、「資本一般」が貨幣を生む貨幣という資本の最も一般的な現象

13) 以下、本稿で〈〉で示すのは筆者による要約である。引用文中の〔〕による挿入も引用者すなわち筆者によるものであるが、{}は草稿でのマルクスによる角括弧を示すものである。

形態にまで達するためには、それは「資本と利子」で締め括られなければならない、ということになる。前者プランではⅡのうちの2) という位置に置かれていたこの項目が、後者プランでは「I. 一般性」の最終項に移されたのも、こうした理由からだと考えられる<sup>14)</sup>。さらに、利子生み資本が「利潤をもたらす資本の純粹に抽象的な形態」として登場するというのは、同時にここで資本物神が完成されるということでもある。「要綱」ではこの物象化の側面については明示的に述べられていないが、上の言葉はこのことをも十分に示唆している。

他方、マルクスは上の箇所よりも以前に、「利子のところでは二様の考察が必要である」として、次の二つのことを挙げていた。

「第1に、利子と利潤とへの利潤の分割。……この区別は、貨幣資本家〔monied capitalists〕から成る一階級が産業資本家から成る一階級に対立するようになると、感じられるもの、誰にでもわかるものとなる。第2に、資本そのものが商品となる、言い換えれば、商品（貨幣）が資本として売られる。これはたとえば、資本が、他のすべての商品と同様に、その価格を需要供給に合わせることを意味する。つまり、需要供給が利子率を規定するのである。だからここで、資本としての資本が流通にはいるのである」<sup>(10)</sup>。

このようにマルクスは、利子の考察にさいして、①利子と利潤とへの利潤の分裂、および、②資本としての資本が商品となり、その価格である利子率はそれへの需給によって決まること、この二点について述べようとしていたのである。

そこでは、のちの『資本論』第3部の現行版第21-24章での展開の最も中心的なテーマがすでに構想されていたとすることができる。「要綱」では、資本という商品の使用価値を、平均利潤ではなく、たんに利潤をもた

14) 前者プランの1の最終項は「3) 貨幣としての資本」である。ここでの「貨幣としての資本」とは、利子生み資本のことではなくて、価値の自立的形態としての貨幣の姿態をとった資本のことであろう。

らす性質としているが、利潤率の異なる諸資本と平均利潤率への均等化が存在しない「資本一般」では当然のことであった<sup>15)</sup>。また、自己資本さえも利子を生むという、質的分割の骨化や、企業利得の労賃への転化などについては触れられていないが、総じて資本物神の展開にまで筆が及ばないまま中断されたという事情を考慮に入れておかなければならない。

ところで、「資本と利子」のところでは、以上のように信用ないし信用制度にはまったく触れようとしていない。これは、当時の「一般性」すなわち「資本一般」の対象が、特殊の諸資本、個別的諸資本、要するに「多数の資本」を捨象した、したがって一個の資本（国民的資本、社会的総資本、賃労働に対立する資本）に限定されていたことの必然的な結果であった。複雑な総体から個別・特殊を捨象して一般を把握し、そのあとでこの認識に基づいて特殊、個別を展開していった、総体を観念的に再生産する、というのは、マルクスが最後まで貫いた方法の一側面であるが、当時はこれが、「多数資本」捨象といういわば対象限定の方法として具体化されていたのである。さきの前者プランから後者プランへの改作こそ、この方法を明確にしたものであって、「資本と利子」を「資本一般」の末尾に置く構想も、その一環として成立したのであった。ここでは「資本と利子」は、次のように、「資本一般」を締め括ると同時に、「多数資本」に移行していく契機としての位置をも与えられていたのである。

「この……形態は、それ以前の諸形態にある資本を前提し、また同時に、資本から特殊の諸資本への、実在的諸資本への移行をなすものである。というのは、いまやこの最後の形態では、資本はその概念上すでに、自立的に存立する二つの資本に分かれるのだからである。二者が与えられれば、次には多者一般が与えられる。この展開は、このようにして進んでいくのである」<sup>(11)</sup>。

15) むしろ、それにもかかわらず、「ある率で利潤を生む」とされていたことに注目すべきであろう。たんに「利潤を生む」ということではないのである。

### (3) 「経済学批判」体系プランにおける信用

「要綱」中の後者プランで、利子および信用に関する項目の第2のものは、「Ⅲ. 個性性」中の3項目である。この3項目は、「批判」体系プランの確立を告げる1858年4月2日付エンゲルスあてのマルクスの手紙で、「貨幣市場としての資本」の項目が消え、「信用」と「株式資本」の2項目となっていく<sup>(12)</sup>。

信用に関する諸項目に予定されていた内容は、「要綱」でのもろもろの先取的記述から推測するほかはない。そのなかで、衆目を集めるべくして集めているのは、ノート第6冊の33ページにある記述である。ここでマルクスは、流通時間が生産時間＝価値創造時間にとっての制限であることを述べたのち、「それゆえ資本の必然的傾向は、流通時間なき流通であり、そしてこの傾向は、信用と資本のもろもろの信用の仕組みとの基礎規定<sup>(16)</sup>である」<sup>(13)</sup>と言う。ここでの「流通時間」は広義のそれであって、販売・購買時間だけでなく、「流通機械」である貨幣をも含むのであって、要するに、一切の広義の「流通費」を縮減しようとするのが、資本の本性から生じる「資本の必然的傾向」だというのである。しかし、信用がどのようにしてそれをするのかという点については、「要綱」はわずかのことしか述べていない。なぜなら、それは本来、多数資本を前提とする「信用」の項目でのみ展開できることだからである。商業信用による個別的資本の流通時間の短縮、もろもろの流通する信用による貨幣の代位、貨幣形態で与えられる信用による商業信用の代位など、一方では産業資本が、その成立にさいしてできあいの武器として見出す信用、他方ではそれを基礎とし

16) この「基礎規定 (Grundbestimmung)」は従来多く「基本規定」と訳されてきた。この訳語は、「信用の必然性」の「基本」を「流通時間なき流通」に見る見解を生み出す一因となったように思われる。マルクスが別のところで、「流通時間なき流通」をもたらす信用について、「信用はなお他の諸側面をもっている。しかし上記の側面は生産過程の直接的な本性から生じており、それゆえまた信用の必然性の基礎 (Grundlage) である」<sup>(14)</sup>と述べているように、この「傾向」は「信用の必然性の基礎」なのであり、信用制度の「基礎規定」なのである。

て、産業資本が自ら創造する信用制度のもとでの新たな形態でのもろもろの信用が、それに含まれるべきものである。

「要綱」では信用については、「流通時間なき流通」による「信用の必然性」に関する記述がひとときわ目だっているが、それは、「要綱」が「資本一般」の草稿であり、しかも「資本一般」で触れうる信用の必然性はこれだけであったからである。

しかしながら、これは「信用の必然性の基礎」にすぎず、資本が信用制度をつくりあげていく動因は、むしろ、さきの記述に続く次の文のなかで述べられていると言わなければならない。

「他方ではさらに信用は、資本が、自己を個別諸資本から区別して措定しようと、すなわち、自己の量的制限から区別された資本としての個別的資本〔単数！—引用者〕を措定しようと努める形態でもある。」<sup>(15)</sup>。

ここではすでに個別的諸資本が前提されており、それらが相互に加えあう作用＝競争によって、自己の量的制限を突破して蓄積を進めようとする衝動から、独自の「個別的資本」を措定しようとするのが示されているのであって、これはいうまでもなく当時のプランの「特殊性」＝「競争」ではじめて論じうることであった。その独自の「個別的資本」＝「自己の量的制限から区別された資本としての個別的資本」とは次のとおりである。

「特殊な実在的諸資本そのものから区別される資本一般は、一つの実在的な存在である。……たとえば、諸銀行に蓄積され、あるいは諸銀行によって配分される、しかもリカードの言うように、まったくみごとに生産の要求に比例して分配される資本は、個々の資本家たちに属するものであるにもかかわらず、資本だというその基本的形態〔elementarische Form〕において、この一般的形態における資本となっているのである。……それゆえ一般的なものは一方ではたんに思想上の種差にすぎないが、この種差は同時に、特殊なもの形態および個別的なもの形態と並ぶ一つの特殊な実在的形態でもある

のである。」<sup>(16)</sup>。

要するに、社会の貨幣資本と貨幣とが銀行に集中されて貸付可能な貨幣資本となり、これが資本家階級の共同的資本として銀行によって配分される、ということなのである。資本がこのような「個別的資本」を措定しようとするさいに取る形態とは、銀行制度とそのもとで形成される貨幣資本(monied capital)にはかならない。「信用」がそうしたものであることを述べたあと、マルクスは次のように書いている。

「しかし、資本がこの方向で成り上がる最高の結果は、一方では架空資本である。他方では信用は、ただ、集中の新たな要素としてのみ、すなわち、集中していく個別的諸資本のかたちで諸資本を絶滅していくことの新たな要素としてのみ現われる」<sup>(17)</sup>。

ここでは信用制度がもつ二面的性格、すなわち一方では、上のように形成される貨幣資本〔monied capital〕はその大部分が架空資本でしかないのであり、総じて信用・銀行制度は、巨大な詐欺・賭博制度をつくり出すものなのだということ、他方では信用・銀行制度は集中のための槓杆となり、資本主義的生産を最終の形態にまで発展させる推進力となるのだということ、この二面的性格が指摘されているのである。

かりに「信用の基本規定」という表現を使うとすれば、銀行のもとに貨幣資本(monied capital)が形成され、銀行によって配分されるという、上記の側面こそそれにあたるものであることは、1858年4月2日付の手紙で、マルクスがエンゲルスに「I. 資本」の4項目を説明するさいに、「c) 信用。ここでは資本が個別的諸資本に對立して一般的要素として現われる」<sup>(18)</sup>、としているところからもわかる。

また、「批判」体系プランでの「競争」から「信用」への移行も、まさに、「資本が自己を一般的資本として措定しようとする」必然性によって行なわれるのであった。この点はのちの『1861-1863年草稿』のなかの次の記述に最もよく示されている。

「つまり、資本家階級全体の資本が、各部面の資本家たちの資本所

有に比例してではなく、彼らの生産要求に比例して、各部門の使用に任せられるのは、信用においてなのであって——他方、競争においては、個別的資本は自立して互いに対立するものとして現われる——、信用は資本主義的生産の結果であるとともに条件でもある。そしてこのことがわれわれに、諸資本の競争から信用としての資本へのうわしい移行を与えるのである」<sup>17)</sup>。

さらに、「信用」から「株式資本」への移行もこの同じ側面にかかわるものである。マルクスは「要綱」で、「競争」→「信用」→「株式資本」という一連の移行の核心が、「個別的諸資本の外見的独立性と自立的存続との止揚」の進展にあること、「株式資本」は「この止揚の行きつく窮極の形態」であることを、次のように述べている。

「まさに個別諸資本の相互間の作用こそ、それらが資本として振舞わなければならないようにさせるのであり、個別的諸資本の外見的には独立した作用と個別的諸資本の無秩序な衝突こそが、それらの一般的法則の措定なのである。……諸資本の個別的資本としての相互間の作用は、こうしてまさに、諸資本の一般的資本としての措定となり、また個別諸資本の外見的独立性と自立的存続との止揚となる。この止揚がさらに著しく生じるのは、信用においてである。そしてこの止揚の行きつく、だが同時に、資本にふさわしい形態にある資本の終局的措定でもある窮極の形態は、株式資本である」<sup>19)</sup>。

以上のことを資本主義的生産にとっての信用制度の意義・役割という見地から見ると、①流通費の縮減、②利潤率均等化の媒介、③資本所有の潜在的止揚、という、のちに『1861-1863年草稿』<sup>(20)</sup>、『資本論』第3部の現行版第27章利用部分<sup>(21)</sup>、同第36章利用部分<sup>(22)</sup>で繰り返し述べられている諸点に帰着することはまったく明らかである。

信用の必然性についての以上の二側面の記述のあと、マルクスは信用制度そのものの二つの側面、すなわち①「貨幣を形態契機としてのみ措定し

17) 『1861-1863年草稿』。MEGA<sup>®</sup> II/3.3, S. 858. 『資本論草稿集』⑥, 298 ページ。

ようとする企て」、すなわち流通する信用による貨幣の代位、②「諸機関のかたちで流通時間そのものに価値を与えようとする、流通時間の一切を資本として措定しようとする企て」、すなわち銀行制度による一切の貨幣の利子生み資本への転化の努力、について述べている<sup>(23)</sup>。これは、『資本論』第3部の現行版第25章における信用制度の二つの側面についての記述<sup>(24)</sup>の原型にはかならない。

以上見てきたところから明らかなように、マルクスはすでに「批判」体系プランを確立する段階で、信用制度とそれとでの貨幣資本 (monied capital) について、のちの『資本論』第3部でなされている記述の核心ともいうべき諸点を、明確に把握していたのである。ただそれらは、当時のプランにおける「資本一般」に属さないものであったために、「要綱」で詳述されることがなかったのであった。

## B 『1861-1863年草稿』における利子と信用

### (1) 「資本一般」への「多数資本」の導入

「批判」体系プランに基づき、『経済学批判 第1冊』の続きとして1861年8月に着手された「資本一般」の仕事は、「剰余価値に関する諸学説」を含む23冊のノートに結実し、1863年7月に終わった。この『1861-1863年草稿』の執筆中に、マルクスは平均利潤率の形成と価値の生産価格への転化の問題を基本的に解決したが、これを「資本一般」のなかで取り扱うことにした結果、プランに重大な変更を加えることになった。

マルクスは、「第1章資本の生産過程」の「3. 相対的剰余価値」を中断して「第3章資本と利潤」を書き、そのあと、第1章の「5. 剰余価値に関する諸学説」に着手した<sup>(18)</sup>。

18) 「第3章資本と利潤」は、MEGA編集者の推定とは異なり、「諸学説」(1862年3月中旬～12月)に着手するまえの1861年12月に書かれたと見られる。この順序と時期についての太田泉氏の考証(太田泉「一般的利潤率・生産価格と剰余価値の利潤への転化」、『北海学園大学・経済論集』第30巻第3号、1983年)の結論は正しいものと考えられる。

「第3章 資本と利潤」は、「批判」体系プランの「両過程の統一、資本と利潤・利子」にあたるものであるが、利潤率低下法則までで<sup>25)</sup> <sup>26)</sup> <sup>27)</sup> 中断している。ここで注目されるのは、剰余価値の利潤への転化には、剰余価値が前貸総資本との関連で利潤という形態を受け取る「形態的転化」と、平均利潤率が成立して諸資本が生む剰余価値とそれらに帰属する利潤とが量的に異なるようになる「実体的転化」との二段階があり、後者は前者の「必然的帰結」だとされている<sup>25)</sup> <sup>26)</sup> <sup>27)</sup> ことである。そこで、「資本一般」は「多数資本」を捨象したものであったから、ここでは本来、「多数資本」を前提する「実体的転化」は論じえないはずであったにもかかわらず、マルクスは次のように書く。

「この点の詳細な考察は競争の章に属する。しかしながら、明らかに一般的であることはここでもやはり説明されなければならない」<sup>28)</sup>。すなわち、「実体的転化」に関する「明らかに一般的であること」は「資本一般」のなかでも論じる、というのである。これは、「多数資本」捨象という、「資本一般」の対象限定を放棄する第一歩であった。しかしここでもまだ、「標準価格」(＝生産価格)を「詳しく研究することは諸資本の競争に属する」<sup>29)</sup> としながらも実際にはこの点をほとんど論じていないし、超過利潤は「この考察にはまったく属さない」<sup>30)</sup> としていた。

ところが、このあと「諸学説」にはいって、ロートベルトゥスの地代論とリカードウの地代論との検討のなかで平均利潤率および生産価格をめぐる諸問題に基本的に決着をつけると、さらに第二步を進めることになった。マルクスは、「諸学説」も終りに近いノート第18冊に『資本論』の第1部と第3部とのプランを三つ記したが、その最初のものがまさに、「資本と利潤」のうちの「一般的利潤率の形成が取り扱われる第2章」のプラン<sup>31)</sup> であって、ここではすでに有機的構成を異にする諸部門の諸資本が考察のなかに完全に取り入れられており、その4)では「一般的利潤率の形成(競争)」が論じられることになっている。そのあとに書かれた「資本と利潤」のプラン<sup>32)</sup> (以下、「資本と利潤」プランと呼ぶ)では、その

2) が「利潤の平均利潤への転化。一般的利潤率の形成。価値の生産価格への転化」であり、4) には、「価値と生産価格との区別の例証」として「地代」を予定している。ここにいたって、「多数資本」捨象という対象の限定は取り払われ、かつては「競争」のなかではじめて論じられるはずであった市場価格、市場価値、生産価格などの諸範疇とそれらを成立させる競争とが、「資本一般」のなかですでに論じられることになったのである<sup>19)</sup>。

上の三つのプランを書いたのとほとんど同じ時期の1862年12月28日に、マルクスはクーゲルマンに、「資本一般」だけを含む新著は『資本——経済学批判——』と題され、自分の仕事としてこれに続くべきものは「競争と信用」であって、自余の項目は余人に委ねることになるかもしれない、と告げた<sup>37)</sup>。そこでは依然として「資本一般」という言葉を使っているが、その内容にはすでに上のように大きな変化が生じていたのである。

## (2) 『1861-1863年草稿』における利子生み資本

『1861-1863年草稿』のなかで利子および利子生み資本を論じているのは、「諸学説」を中断して書かれた、ノート第15冊891-944ページ<sup>20)</sup>である。ここは、同じノートの表紙裏にある、執筆プランとしてメモされたと

19) この第二步が踏み出されたのは、「諸学説」のなかでマルクスがロートベルトゥスを論じ終えてリカードウの地代論を論じるにいたる、1862年6～7月のあいだのことと見ることができる。ロートベルトゥスを論じているノート第10冊の451ページでは、絶対地代については「本書の対象に属さない、のちの研究に委ねる」<sup>(33)</sup>とし、また1862年6月18日付エンゲルスあての手紙では、地代については「この部分ではそれを暗示することさえしようとは思っていない」<sup>(34)</sup>と書いていた。ところが、リカードウの地代論を論じているノート第11冊の578-579ページでは、「地代の詳細な説明」は「土地所有」を論じることになればそで行うが、「価値および費用価格（＝生産価格）に関する私の理論の例証として地代の一般的法則を展開すること」<sup>(35)</sup>はここでの問題だとしており、また1862年8月2日付エンゲルスあての手紙では、「結局のところ、すぐにこの巻のなかに1章を挿入し、地代論を、つまり以前に立てた一つの命題の「例証」として、持ち込むことをもくろんでいる」<sup>(36)</sup>と書いた。この例証をもちこむためには、「それ以前に立てられた命題」を含む「価値と費用価格とに関する私の理論」が、すなわち生産価格論が導入されていないことには明らかである。

20) 『資本論草稿集』⑦, 404-542ページ。

見られる内容目次のなかの、利子生み資本に関わる諸項目<sup>(38)</sup>に当たるものと考えられる<sup>21)</sup>。

「批判」体系プランでは「資本と利子」は「両過程の統一、資本と利潤・利子」のなかで論じられ、「資本一般」を締め括るものであったが、さきに触れた「資本と利潤」プランでは、利子生み資本については、「8. 産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本」で取り扱ったのち、それをも踏まえて「9. 収入とその諸源泉」を論じる予定であった。そしてさらに「10. 資本主義的生産の総過程における貨幣の還流運動」および「11. 俗流経済学」の2項目を書いたのちに、最後に「資本と賃労働」と題する「結び」が全体を締めくくることになっていた<sup>(39)</sup>。その締め括りがかつての「資本と利子」から、「収入とその源泉」→「還流運動」→「俗流経済学」→「資本と労働」という諸項目に変わったのは、「地代の一般的法則」が価値と生産価格との区別の「例証」として「資本と利潤」で論じられることになったことを前提としている。このことによってはじめて、労賃・利潤（利子）・地代という「三大階級」の収入を、また、労働—労賃、資本—利子、土地—地代、という資本主義的生産のもとでの完成した物象化が生み出す「三位一体的定式」の観念を総括的に論じることが可能となったのである。

マルクスがノート第15冊で利子生み資本について記述するとき、すでに、そのあとに「収入とその諸源泉」という項目が予定されていたことは、たとえばその少し前のところで、「収入とその諸源泉に関する項目」<sup>(40)</sup>と書いているところからも明らかである。つまり、この利子生み資本についての記述は、「資本と利潤」プランでの「8. 産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本」の項目を準備するものであった。「剰余価値に関する諸学説」を中断してこれに取りかかったのは、おそらく、「諸学説」にかかるまえに書いた「第3章 資本と利潤」が利潤率低下法則まで

21) 三宅義夫「1861-1863年草稿とメガ編集の諸問題」、『マルクスの現代的探求』、八朔社、1992年、131-132ページ、参照。

のところでは途切れていたもので、それ以降のところを書き進める必要があり、しかも「要綱」では「資本と利子」には——「資本一般」の締め括りとなるはずであったにもかかわらず——ほとんど筆が及んでいなかったもので、その内容をここで展開しておこうとしたのであろう。

このなかで利子生み資本について述べられたことは、『資本論』第3部第1稿のうちの現行版第21-24章に利用された部分でのそれと基本的に一致しており、また多数の箇所が後者のなかに取り入れられているが、『資本論』での整理された叙述にたいして、ここでは利子生み資本がはじめから生産諸関係の物象化との関連において論じられており、叙述はかなり錯綜したものとなっている。そのなかでとくに注目されるのは、「資本一般」の対象限定の枠が破られた結果、利子生み資本についても重要な内容が新たにはいつてきたことである。

第1に、資本という商品の使用価値が、ここではたんに利潤ではなくて平均利潤を生む力とされるようになった。

第2に、利子生み資本は現実には、個別的諸資本から区別される一般的資本、すなわち銀行の貨幣資本 (monied capital) として存在しているのだ、ということがここで述べられるようになった。

この二つのことは相互に深く関連している。前者は、「貸し手が資本家に要求するものは一般的利潤率(平均)を基準にして計算されているのであって、それからの彼の個人的な偏倚を基準にしてではない。平均がここでは前提となる」<sup>[40]</sup>ということからして、本来そうであるべきものであるが、「批判」体系プラン中の「資本と利子」では、平均利潤率が前提されていなかったために、抽象的に「ある率で利潤を生む力」とされるほかはなかったのであった。このように利子が平均利潤率を基準にして計算されるのは、後者の事態に基づくものである。すなわち、のちに『資本論』第3部の現行版第22章の草稿にほとんどそのまま取り入れられた、この点についての記述では、大要次のように書かれている。

〈貨幣市場では特殊の諸部面の競争はなくなり、資本への需要では

資本が現実には階級の共同的資本として現われる。他方貨幣資本は、それが共同的要素として諸部面にそれらの生産上の要求に応じて配分されるときの姿態を現実にもっている。さらに貨幣資本は、集積され組織されて、資本を代表する銀行業者たちの統制のもとに置かれる<sup>(42)</sup>。

これは、すでに見た 1858 年 4 月 2 日付の手紙で「信用」を特徴づけていた、「資本が個別的諸資本に対立して一般的要素として現われる」、ということの指摘<sup>(43)</sup>にはかならないのであって、「批判」体系プランでは「信用」ではじめて論じられるはずのことであった。それがいまや、「資本一般」のなかで論じられるにいたったのである。さらに、これらのことが示唆しているのは、利子生み資本、資本としての商品、利子率などがすべて、信用制度のもとでの貨幣市場におけるそれらの現実的形態から抽象されたものにかならないということである。

このように、かつて「信用」で論じられるはずであったことがここで論じられるようになったけれども、「信用」が「資本一般」の外に残されていることには変りがなかった。一般的利潤率に対応するのは一般的利子率であるということ「詳細に展開することをここで意図しているわけではない、というのは利子生み資本の分析<sup>(22)</sup>はこの一般的な項目ではなくて信用に関する項目に属するのだから」<sup>(44)</sup>である。また、利子率の大きな固定性と一様性とはここでは論じられない、というのは「そのような論述は信用の項目に属する」<sup>(45)</sup>からである。また、利子と産業利潤とへの利潤の分割の比率がどのように決定されるかもここでは研究できない、「それは資本の、すなわち諸資本の、実在的な運動の考察に属することであり、それに対して、われわれがここで取り上げているのは資本の一般的な諸形態な

22) ここで「利子生み資本の分析」と言っているのは、のちに『資本論』第3部の現行版第27章の草稿で次のように書いているところで「利子生み資本そのものの考察」としているものにあたと考えられる。すなわち、信用制度下の利子生み資本の考察である。

「これまでわれわれは主として信用制度の発展 {そしてそれに含まれている資本所有の潜在的な廃止} を、主として生産的資本に関連して、考察した。いまわれわれは、利子生み資本そのもの {信用制度による利子生み資本への影響、ならびに利子生み資本が取る形態} の考察に移る。」<sup>(47)</sup>。

のである」<sup>(46)</sup>。

### (3) 『1861-1863年草稿』における貨幣取扱業

利子生み資本に続いてマルクスは、ノート第15冊944-973ページ、第17冊1029-1038ページおよび1075-1084ページ<sup>23)</sup>に、「商業資本。貨幣取扱業に携わる資本」<sup>24)</sup>を書いた。このなかでわれわれの主題に関連して注目されるのは、貨幣取扱業 (Geldhandel) についての叙述である。マルクスは「要綱」では、貨幣取扱業 (Geldgeschäft) が本来の商業から分離していくことには言及していた<sup>(48) (49) (50) (51)</sup>が、それ以上の考察はしていなかったし、『1861-1863年草稿』でも、ここまでのところでは、これについて言及さえもしていない。ここではじめて彼は貨幣取扱業を取りあげたのである。その論述は、利子生み資本のあとでなされているだけでなく、利子生み資本と結びつけてなされている点で、のちの『資本論』第3部の現行版第19章での論述と大きく異なっている。マルクスはここから一部分を『資本論』に取り入れたが、それは、利子生み資本にはまったく触れていないところだけであった。

マルクスは、蓄蔵貨幣としての貨幣が必要とする諸操作を貨幣取扱業が引き受けることを述べているところで、まず蓄蔵貨幣が鑄貨・支払手段・世界貨幣の準備金として機能することを記し、続いて大要次のように言う。

〈蓄蔵貨幣は準備金として機能しないかぎりには蓄蔵貨幣そのものだが、それは資本家にとっては遊休資本である。これは資本家にとっては不生産的資本であり、利潤をもたらす資本として自分で用いるつもりがなければ、少なくとも利子生み資本に転化させたい貸付可能な資本である〉<sup>(52)</sup>。

この「貨幣資本として市場にある貨幣」は、蓄積された利潤、地代、労働

23) 『資本論草稿集』⑧, 5-85 ページ, 222-245 ページおよび 356-379 ページ。

24) ノート第17冊表紙裏に書かれているプランのなかの項目。MEGA<sup>2</sup> II/3.5, S. 1544. 『資本論草稿集』⑧, 4 ページ。

者の所得などからも形成されうるものである。そしてこれに、大要次のような貨幣取扱業の機能が対応する。

〈遊休貨幣が貸し付けられるが、これもまたさまざまな形態（貸付、割引、等々）で貨幣取扱業の特殊的功能として現われる。貨幣取扱業は貸付可能な貨幣資本にとっては、貨幣資本の需給を調整し、それを集中している媒介者である〉<sup>(53)</sup>。

さらに、次のように述べられている。

〈資本家は、貨幣を自分の事業で投下できないかぎり、この遊休蓄蔵貨幣を利子生み資本として増殖しよう、貸し出そうと努める。貨幣取扱業者は階級全体のためにこれを実行する。貸借が受払いと同様に貨幣取扱いに携わる資本の特殊的功能となる。この機能は資本の再生産過程そのものから生じる機能である。以前には蓄蔵貨幣貯水池の集中として現われていたものが、今では同時に、資本として貸付可能な貨幣の集中として現われる〉<sup>(54)</sup>。

これに続けて、金利生活をしようとする資本家の貨幣、生産的資本家の消費ファンド、地主や不生産的労働者の収入の一部なども同じであるとしたうえで、次のように言うのである。

〈これらすべてが貸付可能な貨幣資本として貨幣取扱業者のもとに集中する。彼は階級全体のために貸借する、というよりはむしろ、階級全体の貸借を実行するのである〉<sup>(55)</sup>。

みられるように、ここで「貨幣取扱業者」とされているのは銀行業者にほかならず、彼の機能とされているのは、銀行による「利子生み資本または貨幣資本〔monied capital〕の管理」<sup>(56)</sup>にほかならない。ここでは、「貨幣資本〔moneyed capital〕、利子生み資本も貨幣取扱いに携わる資本に属する」<sup>(57)</sup>と言われるばかりでなく、「商業資本（商品取扱業）および貨幣資本〔moneyed capital〕（貨幣取扱業）」<sup>(58)</sup>、「貨幣資本〔moneyed capital〕（ここでは貨幣取扱業の意味での）」<sup>(59)</sup>とも言われている。また信用制度との関連については、「信用制度とともに はじめて、貨幣資本

〔monied capital〕と貨幣取扱業とは、資本主義的生産様式そのものから出てくる形態を受け取る」<sup>25)</sup>と言う。

このように、ここでは、銀行が行う貨幣取扱業の側面と銀行特有の機能である利子生み資本の管理とが一緒にされ、一緒に論じられているだけでなく、後者の機能も貨幣取扱業そのものの機能とされているのである。このような取扱いは、一方では、貨幣取扱資本と利子生み資本とのあいだの区別と関連とについて——『資本論』第3部では読み取ることのできない重要な視点を示唆するとはいえ——マルクスのなかにまだ不明な部分があったことから、他方では、利子生み資本についての叙述を前提にして貨幣取扱資本を論じるという叙述の仕方から生じたものであろう。なお、この問題についての詳細には「信用としての資本の項目」ではじめて立ち入れる、としている<sup>(60)</sup>。

さて、貨幣取扱業ののちマルクスは「挿論 資本主義的再生産における貨幣の還流運動」を書き、商業資本および貨幣取扱資本について若干の補足をしてから、ふたたび「剰余価値に関する諸学説」にもどってその最後の部分を書いた。そしてこのなかで、さきの三プランを記したのである。そのうち「資本と利潤」プランでは、利潤にかかわる七つの項目のあとを、「8) 産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本。9) 収入とその源泉。10) 資本主義的生産の総過程における貨幣の還流運動。11) 俗流経済学。12) むすび。資本と賃労働」<sup>(61)</sup>としていた。ここで「貨幣資本〔Das Geldcapital〕」とされているのは、さきの「貨幣資本〔moneyed Capital〕（ここでは貨幣取扱業の意味での）」<sup>(62)</sup>であろうと考えられる。つまりここには、草稿のなかで実際に論じられたものが、その順序どおりに挙げられているわけである。このように、利子生み資本および商業資本を独立の一章とし、そのあと物象化の問題をも含む「収入とその源泉」以下の項目で締め括る、という構想は、「資本」を独立の著書としてまとめようというマルクスの意図を如実に示すものであった。

25) 『1861-1863年草稿』。MEGA<sup>Q</sup> II/3.5, S. 1701. 『資本論草稿集』⑧, 244 ページ。

## C 『資本論』における利子と信用

### (1) 「資本一般」から「資本の一般的分析」へ

1863年7月に『1861-1863年草稿』を終えたマルクスは、今度は『資本論』に着手し、第2部(第1稿)と第3部(第1稿)とを含む全3部を1865年12月までに書きあげた。刊行された第1部第1版(1867年)は、このあと清書稿として書き直されたものである。「歴史的・批判的部分」を第4部とする全4部作の構想は、すでに第1部の執筆中から確立していた。

『資本論』も、「批判」体系プランの「資本一般」も、どちらも資本に関する「一般的なもの」であるというかぎりではなんの区別もない。しかしその「一般性」の意味は大きく変化した。「資本一般」は、「第1部 資本」のなかの、「多数資本」捨象によって得られた「一般性における資本」を対象とする一構成部分であって、続く「競争」(特殊性)、「信用」(個別性)へと上向していったのはじめて「資本」の具体的な現象形態に辿りつくことができるものであった。したがって、「資本一般」を締め括るべき「資本と利子」もきわめて抽象的なものにとどまらざるをえなかった。それはいわば、いまだ現象から分離された本質の段階にとどまるものであった。「資本一般」の「一般性」は、対象を厳しく「一般的なもの」に限定するという意味でのそれであったのである。

これにたいして『資本論』の「一般性」は、その研究、分析、叙述が、つまりその認識が一般的なものだ、という意味でのそれである。すなわち、『資本論』は「資本主義的生産の一般的研究」<sup>(63)</sup>、「資本の一般的分析」<sup>(64)</sup>、「資本主義的生産様式の内的構造のその理想的平均における叙述」<sup>(65)</sup>であり、したがって特殊研究、個別的な分析、動態における叙述、等々と区別されるものである。かかるものとしての『資本論』は、それ自体として資本についての一般的認識を完結しなければならない。それは「批判」体系プランの出発点たる「序説」プランに立ち戻って言えば、「ブルジョア社会

の内的編制を形づくり、また基本的諸階級の基礎となっている諸範疇」の分析を一般的に完了することである。そのためには、「多数資本」捨象によって対象を限定するという方法を捨て、かつて「競争と信用」、さらに「土地所有」と「賃労働」とに予定されていた諸対象のなかから、資本主義的生産の内在的諸法則の一般的な現象諸形態、あるいは一般的なものを表わすかぎりでの具体的な諸形態をなすものを取り入れなければならなかった。ここで重要なことは、対象をきびしく「一般的なもの」に限定することではなくて、「一般的研究」として遺漏なきを期すことであった。

3部分からなる点で旧「資本一般」と同じである『資本論』（「理論的部分」）のどの部についても、この転換の結果を各所に見ることができるが、それを最も明確に示すのは、「3. 資本と利潤」から「第3部 総過程の諸形象化〔Gestaltungen〕」<sup>26)</sup>への変化である。マルクスは第3部第1稿の冒頭にこの表題を記したうえで、その直後に、この部の課題は「全体として考察された資本の過程」、すなわち生産過程と流通過程との統一「から生じてくる具体的な諸形態を見つけだして叙述すること」、すなわち「資本の諸形象化」を「展開する」ことであるとした<sup>66)</sup>。すなわち、「諸資本の現実的運動」そのものは範囲外であるとしても、「諸資本の現実的運動のなかで諸資本が現象するさいの具体的な諸形態」を明らかにすることによって、「資本の一般的分析」を完成させ、かくして「諸資本の現実的運動」を叙述するための確固たる土台を置こうとしたのである。その結果、利子生み資本も、もはや「利潤をもたらす資本の純粹に抽象的な形態」であるがゆえに、またそうした観点でのみ論じられるのではなくて、それ自体資本の一つの特殊的形態として取りあげられ、しかもわれわれの表象に直接

26) 『資本論』第3部の現行版は「資本主義的生産の総過程」という表題をもつが、これはエンゲルスによるものであって、マルクス自身は、「総過程の諸形象化」（第3部第1稿タイトルページ（MEGA<sup>®</sup> II/4.2, S.5 u. S.7）および第1部第1版序文<sup>67)</sup>）、「総過程の形象化」<sup>68)</sup>、「資本がその発展の進行中に帯びるさまざまな形態」<sup>69)</sup>（第1部フランス語版でのドイツ語「第1版序文」の訳文）、「剰余価値の、そのさまざまな形態と互いに分離した構成諸部分とへの転化」<sup>70)</sup>、と呼んでいた。「形象化〔Gestaltung〕」とは、具体的な「姿態〔Gestalt〕」をとっていくこと、という意味である。

に与えられている、信用制度のもとでの貨幣資本という「具体的姿態」にまで、この「資本の形象化が展開」されることになったのであった。

## (2) 貨幣取扱資本と利子生み資本

第3部の現行版は、未定稿の性格がきわめて強いマルクスの第1稿からエンゲルスがまとめあげたもので、とくに現行版第5篇では大きくエンゲルスの手がはいっている。ここでは、第1稿そのもののなかでの利子生み資本と信用制度との取扱いを見ることにする<sup>27)</sup>。

- 27) 『資本論』第3部の第1稿とエンゲルスの編集になる現行版とはきわめて多くの点で異なっているので、マルクスの第3部、とりわけその第5章（エンゲルス版第5篇）について語るときには、第1稿の草稿そのものにつくことが望まれる。

この第1稿とそのMEGA版、そして第1稿第5章の全体について、筆者は次のものを書いた。①『『資本論』第3部第1稿について』、『経済志林』第50巻第2号、1982年。②『『資本論』第3部第1稿のMEGA版について』、『経済志林』第62巻第2号、1994年。③「〔コメンタル〕第5篇 利子と企業者利得とへの利潤の分裂 利子生み資本」、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義』第28/29号、1996年。

第1稿は新MEGA第4巻第2分冊として刊行されたが、邦訳はまだない。本稿に直接に関わるエンゲルス版第19章利用部分と第5篇（草稿第5章）については、いずれも『経済志林』に掲載された以下の拙稿が、第1稿からの訳文を掲げ、それに、第1稿を所蔵する社会史国際研究所（アムステルダム）での筆者の調査に基づく考証を加えているので、利用されたい。本稿で結論的に述べた多くの論点についても、本稿にいちいち注記することをしていないが、これらの論稿のなかでさらに細部にわたって論じている。（残るエンゲルス版第35章および第36章の部分についてのもも遠からず発表したいと考えている。）①「『貨幣取扱資本』（『資本論』第3部第19章）の草稿について」、『経済志林』第50巻第3・4号、1983年。②「『利子生み資本』（『資本論』第3部第21章）の草稿について」、『経済志林』第56巻第3号、1988年。③「『利潤の分割』（『資本論』第3部第22章）の草稿について」、『経済志林』第56巻第4号、1989年。④「『利子と企業者利得』（『資本論』第3部第23章）の草稿について」、『経済志林』第57巻第1号、1989年。⑤「『資本関係の外面化』（『資本論』第3部第24章）の草稿について」、『経済志林』第57巻第2号、1989年。⑥「『信用と架空資本』（『資本論』第3部第25章）の草稿について（上）（中）（下）」、『経済志林』第51巻第2, 3, 4号、1983-1984年。⑦「『貨幣資本の蓄積』（『資本論』第3部第26章）の草稿について」、『経済志林』第57巻第4号、1990年。⑧「『資本主義的生産における信用の役割』（『資本論』第3部第27章）の草稿について」、『経済志林』第52巻第3・4号、1985年。⑨「『流通手段と資本』（『資本論』第3部第28章）の草稿について」、『経済志林』第61巻第3号、1993年。⑩「『銀行資本の構成部分』（『資本論』第3部第29章）の草稿について」、『経済志林』第63巻第1号、1995年。⑪「『貨幣資本と現実資本』（『資本論』第3部第30-32章）の草稿について」、『経済志林』第64巻第4号、1997年。⑫「『信用制度下の流通手段』および「通貨原理と銀行立法』（『資本論』第3部第33章および第34章）の草稿について」、『経済志林』第67巻第2号、1999年。

まず注目されるのは、第1稿でははじめ第4章で、商品取扱資本および貨幣取扱資本を論じるとともに、引き続いてこの章のなかで利子生み資本を論じる予定であったということである<sup>28)</sup>。さきに見た「資本と利潤」プランでも、これらを同じ一つの章で論じることになっていた。これは、これらの資本が産業資本の第2次の形態、派生的形態であるので、資本の特殊的形態を論じる一章を設けて、ここでこれらをまとめて論じようとしたものであろう。第4章に着手するときにもこの一章構想はまだ残っていたのである。

しかし、「資本と利潤」プランでは、「産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本」となっていたのだから、内部の順序が変わったのであり、すでにこの点で、それ以前に大きな転換があったことを推測させる。「資本と利潤」プランでは、まず利潤と利子とへの利潤の分裂を論じ、それに関連して商業資本について述べ、それから銀行の貨幣資本〔moneyed capital〕でもある貨幣取扱資本に触れる、という順序であったのにたいして、第1稿では、商人資本を一つの特殊的資本として、独自に、しかも利子生み資本以前に純粹に把握し、その利潤率均等化への参加をも前提したうえで利子生み資本にはいる、という筋道に変わっていたのであろう。そして実際に第4章のなかで商人資本について書いていくうちに、商人資本（商品取扱資本および貨幣取扱資本）と利子生み資本とはそれぞれ別個の章で取り扱うべきだ、という結論に到達したのであった。こうして、利潤（産業利潤、商業利潤）、利子、地代、をそれぞれ独立の章で論じ、最後に「収入とその源泉」で総括する構想が最終的に確立したのである。

第1稿第4章では、貨幣取扱資本は、『1861-1863年草稿』でとは異なり、利子生み資本からも信用制度からも完全に切り離して論じられている。ここで貨幣取扱業を「純粹の形態で、すなわち信用制度から切り離されたものとして」<sup>(7)</sup> 考察する理由を、マルクスは次のように述べている。

「貸借の機能や信用取引が貨幣取扱業のそのほかの機能と結びつい

28) 前掲拙稿「『資本論』第3部第1稿について」、122-123ページ、参照。

たとき、貨幣取扱業は完全に発展している。……しかしこれについてはあとではじめて〔論じる〕。というのは、われわれは次章ではじめて利子生み資本を展開するのだからである」<sup>(72)</sup>。

すなわち、完全に発展した貨幣取扱業では貸借や信用取扱いがその機能をなすのであるが、これは利子生み資本を前提するので次章で論じる、というのである。『1861-1863年草稿』でのさきに見た記述と重ね合わせて考えるならば、ここでの「純粋な形態」での貨幣取扱業とは、完全に発展したそれである信用制度下の銀行業から「貨幣流通に伴う技術的諸操作」とそれを自己の業務とする資本とを抽象したものであることが明らかとなる。他方では、貨幣取扱業の手に、「流過程の必然的な沈澱物」<sup>(73)</sup>たる購買手段・支払手段の準備金（これは最小限に縮小される）と遊休貨幣資本とが集中することによって、ここに、第2部で解明された休貨貨幣と遊休貨幣資本の形成の必然性とそれらの価値増殖への要求とが、集約された具体的形態で現われてくるのであり、次章の冒頭で商品として流通にはいる貨幣資本はすでにここに与えられているわけである。

さて、その「第5章 利子と企業利得（産業利潤または商業利潤）への利潤の分裂。利子生み資本」であるが、これは全6節からなっている。はじめの4節は現行版第21-24章にあたり、利子生み資本をそれ自体として論じている。次の「5）信用。架空資本」<sup>(79)</sup>は第5章の67%のページを占め、明らかに、信用制度とそれとの利子生み資本とを取り扱っている。「6）先ブルジョア的なもの」は、現行版「第36章 先資本主義的なもの」にあたる部分である。

はじめの4節（現行版第21-24章）での利子生み資本論は、叙述の内容においては、すでに見た『1861-1863年草稿』での利子生み資本論でのそれと基本的に同じである。ただし、①前提とされる平均利潤はここでは商人資本を含む機能資本の全体についてのものであり、②ここではすでに貨

29) エンゲルス編の現行版では、第25章の表題が「信用と架空資本」となっているが、草稿の「5）信用。架空資本」は現行版の第25-35章に相当する部分である。

幣取扱業者の手に集中された貨幣および貨幣資本が前提されており、③三位一体的定式の一項としての「資本—利子」への論及は「収入とその源泉」に移されている。この四つの節での課題は、「利子生み資本の姿態と利潤にたいする利子の自立化とを展開すること」<sup>(74)</sup>であって、これがここで「展開」されるべき「資本の形象化」である。ここでの利子生み資本が、信用制度の形成以前に自立的に存在する利子生み資本でも、信用制度と並んでそれから独立に存在するような利子生み資本でもなくて、まさに信用制度における貨幣資本〔monied capital〕、とりわけ銀行が管理する利子生み資本から抽象されたものであることは、第2節（現行版第22章）に『1861-1863年草稿』の既述の箇所から取り入れられた、貨幣市場では需要される資本も供給される資本も階級共同の資本として現われ、銀行によって統制されるのだ、という記述<sup>(75)</sup>に端的に示されている。

利子生み資本の叙述は、「貨幣が資本として商品となる」という事実、表象を、これ以前に概念的に把握された商品・貨幣・資本の諸法則に基づいて整理し、分析するところから始まっているが、この事実、表象とは、信用制度のもとでの貨幣市場における最も一般的な事実であり、「経済学者たちが事柄をそう考えている」<sup>(76)</sup>ときの表象なのである。これを分析することによって、まず、すべてが外面的なものとして現われる利子生み資本の諸姿態の奥にあって、「経済学者たち」には絶対にとらえることができなかつた本質的な関係が明らかにされている。この本質的關係とは次のことである。

「利子は、利潤すなわち剰余価値（資本によって取得される不払労働）のうち、機能資本家つまり産業家や商人が、自分の資本でなく借り入れた資本を充用するかぎり、資本の所有者つまり貸し手に支払わなければならない部分にほかならないものとして元来現われるのであり、また元来そうしたものである（また現実にそうしたものであり続ける）」<sup>(77)</sup>。

そのうえで、こうして生じる利潤と利子とへの量的分割が「質的分割」に

一転し、ついには自己資本さえも、その所有そのものによって利子を生むという表象、かくしてまた、一切の貨幣は利子を生む自動機械だという完成した資本物神の観念にいたるまで、資本の形象化が、したがってまた物象化が展開されている。

### (3) 信用制度考察の必要とその可能性

第1稿の「5) 信用。架空資本」では、信用制度を概観したのちにこの信用制度のもとでの利子生み資本の諸形態が考察されている。これは、「批判」体系プランの原「資本一般」とも、『1861-1863年草稿』の「資本と利潤」プランとも決定的に異なる点である。利子生み資本の分析になぜ信用制度下の利子生み資本が取り入れられることになったのか。それは、資本の一般的分析としての『資本論』は、利子生み資本についても、それをその概念に一致するかぎりでの具体的な現象形態にまで展開することによって、その一般的認識を完結する必要があったからである。「批判」体系プランでは、「信用」にまで上向して行って「資本」の部が完成したときに、はじめてそのような諸形態に到達することになっていた。『資本論』はそれ自身のうちでそこまで進まなければならない。そして、利子生み資本のそのような具体的現象形態とは、利子生み資本がそこから抽象されてきたところの、完成した信用制度のもとでの貨幣資本の諸形態にほかならない。ここまで展開して行って、はじめて利子生み資本についての一般的認識を終えたと言っているのである。マルクスは、現行版第51章の草稿のなかで次のように書いている。

「企業利得と利子とへの利潤の分裂は同一の収入の分配として現われる！ しかしこの分裂は、まず、自己自身を増殖し剰余価値を生み出す価値としての資本の発展から、支配的な生産関係のこの特定の社会的姿態の発展から生じる！ この分裂は、それ自身のうちから信用制度等々を、したがってまた生産の姿態を展開する。」<sup>30)</sup>

30) 『資本論』第3部第1稿。MEGA<sup>®</sup> II/4.2, S. 899. [MEW, Bd. 25, S. 889-890.]

資本の形象化はここまで展開されなければならないのである。

他方では、「多数資本」捨象の制約から解放された『資本論』は、第3部（第1稿）第5章の「5）信用。架空資本」にいたるまでに、すでに、信用制度を論じるのに必要なすべての前提を置いていた。第2部ではその第1稿で、「流通時間を短縮し、全再生産過程を流動的にたもつための手段として、資本主義的生産から必然的に生まれでてくるもの」<sup>(78)</sup>としての信用制度に言及し、「貨幣を無価値の代理物で置き換えようとする資本主義的生産の傾向」<sup>(79)</sup>を指摘している。これらはいずれも、「資本一般」でも論じられることができた「流通時間なき流通」に属するものである。さらに、「資本一般」とは異なって、「多数資本」をはじめから前提して論じられている第2部（第1稿）「第3章 流通と再生産」のなかでは、蓄積衝動を実現する手段を発展させるものとして、「ある生産部面で生みだされた過剰資本を他の部面で機能させることを容易にするものの形成」<sup>(80)</sup>すなわち信用制度の形成を挙げ、また、「資本蓄積の特殊の一形態としての貨幣蓄積」の研究の必要を言って、「貨幣資本の蓄積が、収入のうち資本にやがて再転化されるはずの部分がひとまず蓄蔵貨幣として遊休する、等々のことを意味するかぎりでは、このことも……利子生み資本についての〔第3部〕第4章<sup>31)</sup>で詳しく考察すべきである」<sup>(81)</sup>としている。このほか、固定資本が信用制度の基礎をなすことも指摘している<sup>(82) (83)</sup>。

第3部では、第1に注目しなければならないのは、第2章3）（現行版第3部第10章）の「一般的利潤率の均等化のための競争。市場価格と市場価値。超過利潤」のなかで、利潤率の均等化は部門間の資本の可動性を必要とするが、それは「組織されていない大量〔Masse〕としての浮動している社会的資本を集中して個別的資本家たちに向き合わせる信用システムの発展」を前提している<sup>(84)</sup>、と述べられていることである。第2に、第3章（現行版第3部第3篇）の「資本主義的生産の進展のうちに生じる

31) ここでの「第4章」がまだ商人資本と利子生み資本との両者を含むものであったことに留意する必要がある。

一般的利潤率の傾向的低下の法則」のなかでも、かつての『1861-1863年草稿』中の「第3章 資本と利潤」においてはまったく排除されていた、個別的諸資本の競争のなかでのこの法則の貫徹の具体的形態が論じられるようになったが、そのなかでは、利潤率の低下に利潤量の増大で対応しようとする資本の傾向は、競争のなかで個別的諸資本の投下資本量増大の衝動として貫き、かくして資本の集中が必至となる、という記述<sup>(85)</sup>がきわめて重要である。この部分は、『1861-1863年草稿』中の「ホジスキンのところ<sup>(86)</sup>」から取り入れられたものであるが、これによって、個別的諸資本がその量的制限を克服しようとする必然性が、明確に前提されることになったのである。第3に、既述のように、個別的諸資本の手から離れて貨幣取扱業者の手に集中した貨幣資本が前提されている。そして最後に、第5章中の、「5) 信用。架空資本」以前のところで、信用制度下の貨幣資本〔monied capital〕から抽象された利子生み資本が純粋な形態で考察され、その形象化、物象化が展開されている。

以上のように、『資本論』では、「批判」体系プランでも「資本一般」で論じえた「流通時間なき流通」だけでなく、同プランでは「競争」ではじめて論じられるものであったために、「資本一般」での「信用」の取扱いを許さなかった諸問題が、第3部第5章5) 以前にすべて論じられているということが出来る。こうして、信用制度に論及することが必要となっただけではなくて、そのための前提が完全につくり出されていたのである。

#### (4) 『資本論』における信用制度の考察

第5章の「5) 信用。架空資本」の冒頭には次のように書かれている。「信用制度とそれが自分のためにつくりだす、信用貨幣などのような諸用具との分析<sup>(87)</sup>は、われわれの計画の範囲外にある。ここではただ、資本主義的生産様式一般の特徴づけのために必要なわずかの点をはっきりさせるだけでよい」<sup>(87)</sup>。ここで「資本主義的生産様式一般の特徴づけのため」

といっているのは、「資本の一般的分析」を完結させるため、ということにはかならない。このことを念頭に置いて上の文を読むならば、次のようなことがいわれていると見ることができる。

〈「資本の一般的分析」を完結させるためには利子生み資本についても、それが信用制度のもとで取る具体的諸姿態にまで形象化を展開する必要がある。そのためにはそれに必要なぎりぎり信用制度に論及し、それを考察しなければならない。しかしながらこの考察は、「信用制度とその諸用具」そのものを本来の対象とする、それなりに自立した「分析」ではない。それは依然として『資本論』の外に残されている〉。このように外に残された「分析」とは、『資本論』でなされた信用制度の考察（これは『資本論』での信用制度論と呼ぶことが許されよう）を自己の基礎的部分として含み、ここから「諸資本の現実的運動」の叙述にまで至る、信用制度そのものを対象とする特殊研究であろう。

以下、「5) 信用。架空資本」では、第1に、完成した信用制度の二つの側面、すなわち信用取扱いと貨幣資本〔monied capital〕の管理との二側面を、それらの基礎との関連において明らかにし、続いて、貸付可能な貨幣資本の諸源泉、貸付の諸形態、銀行業者が取り扱う信用の諸形態について述べている（現行版第25章）。ここでの課題は、信用制度という新たな対象についての表象を整理し、とりあえず信用制度とはどのようなものかを示すことである。第2に、そのような信用制度が資本主義的生産様式の発展のなかで果たす役割を述べている（現行版第27章）。これは、資本主義的生産様式によって信用制度を基礎づけること、言い換えれば信用制度形成の必然性を示すことでもある。そして第3に、トゥックとフラート

32) 「信用制度と……諸用具との分析」は現行版ではエンゲルスによって、「……との詳しい分析」に変えられている。また、この箇所では続いて、「そのさいわれわれはただ商業信用だけを取り扱う」と述べているが、この「商業信用」もエンゲルスによって「商業・銀行業者信用〔der kommerzielle und Bankier-Kredit〕」に変えられた。ここでマルクスが「商業信用」と呼んでいるのは、「公信用」から区別される、私的営業としての trade にかかわる信用、といった意味であると考えられる。この点については、前掲拙稿『信用と架空資本』(『資本論』第3部第25章)の草稿について(下)、49-57ページ、参照。

ンとに関する「とくに経済学的な論評」<sup>(88)</sup>をはさんで(第28章)、第4に、「利子生み資本そのもの{信用制度による利子生み資本への影響、ならびに利子生み資本が取る形態}の考察」<sup>(89)</sup>にはいつている(第29-35章)。この最後の部分が「5)信用。架空資本」の中心的部分をなすものと考えられるが、草稿はここですます未定稿的な性格を強めており、マルクスがここで本来書こうとしたことがどの程度実現されているのか、それを越えることがどの程度書かれているのか、ということ判断するのはきわめてむずかしい。

この「5)信用。架空資本」は、他の5節に比べて不釣合に大きいものであるが、これは、当初の予想よりも記述が詳細にわたって量的に大きくなっていったこと、抜書きなどの材料づくりもここであわせて行ったことのほか、当初論じる予定ではなかった問題を取り上げたこともあるのではないかと考えられる。こうしたことの結果、この「5)」は、事実上きわめて多角的に、しかもある程度はその動態において、信用制度にも触れたものとなっている。後年(1868年4月30日)エンゲルスに第3部の内容を説明したとき、マルクスは第5章の内容を、「利子と企業利得とへの利潤の分裂。利子生み資本。信用制度」<sup>(90)</sup>と要約しているが、ここで最後に「信用制度」とつけ加えたのは、彼の手もとにあった第1稿中の第5章の実際の内容を念頭に置いてのことであったと考えられる。

なお、付言すれば、「批判」体系プランの前半3部すなわち資本(資本一般・競争・信用)・土地所有・賃労働が、「資本主義的生産の一般的研究」である『資本論』と、『資本論』で論じられたことを基礎的部分として含み、かつ「諸資本の現実的運動」にまで展開される、そしてルーズな上向的序列をもつ各特殊研究とに、大きく編成替えされることになったのにたいして、後半3部すなわち国家・外国貿易・世界市場については、公信用や為替相場などに関する項目の位置を含めて、「批判」体系プランでの構想が放棄された、ないし根本的に改作された、と見うる手がかりを見出すことができない。

## 【稿末注】

- 〔1〕「全体は六つの部に分けられている。1. 資本について（若干の前章〔Vorchapter〕を含む）。2. 土地所有について。3. 賃労働について。4. 国家について。5. 国際貿易。6. 世界市場。ときには他の経済学者たちに批判的に言及することはもちろん避けるわけにいかない。ことにリカードウにたいする論難は、彼でさえ、ブルジョアとしては、厳密に経済学的な観点から見ても誤りを犯すことを余儀なくされているかぎりでは、避けられない。だが、全体として、経済学および社会主義の批判や歴史は、別の著作の対象をなすべきものだろう。最後に、経済的諸範疇および諸関係の発展の簡単な歴史的素描が第3の著作になる。」（1858年2月22日付ラサール宛ての手紙。MEW, Bd. 29, S. 551.）
- 〔2〕「最初の分冊はどうしても一つの相対的な全体にならざるをえないだろう。また、それには全展開のための基礎が含まれているので5-6ボーゲン以下でこしらえるのは難しいだろう。だがこれは最後の仕上げのときにはわかるだろう。それは次のものを含む。1. 価値, 2. 貨幣, 3. 資本一般〔Capital im allgemeinen〕（資本の生産過程, 資本の流過程, 両者の統一または資本および利潤, 利子。）」（1858年3月11日付ラサール宛ての手紙。MEW, Bd. 29, S. 554.）
- 〔3〕「次に示すのが第1の部分の簡単な概要だ。このぼろくそ〔Scheiße〕の全体を六つの部に分けるつもりだ。1. 資本について。2. 土地所有。3. 賃労働。4. 国家。5. 国際貿易。6. 世界市場。
1. 資本は四つの篇に分かれる。a) 資本一般〔Capital en général〕。（これが第1分冊の題材だ。）b) 競争, すなわち多数の資本の相互にたいする行動。c) 信用。ここでは資本が個別的諸資本に対立して一般的要素として現われる。d) 同時に資本のあらゆる矛盾を伴っている最も完成した形態（共産主義に急変するもの）としての株式資本。

資本から土地所有への移行は同時に歴史的でもある。というのは、土地所有の近代的形態は、封建的等々の土地所有にたいする資本の作用の産物だからだ。同様に土地所有から賃労働への移行も、たんに弁証法的であるだけでなく、歴史的でもある。というのは、近代的土地所有の最後の産物は賃労働の一般的指定であり、次いで賃労働がこのぼろくそ〔ScheiBe〕全体の土台として現われるのだからだ。』（1858年4月2日付エンゲルス宛ての手紙。MEW, Bd. 29, S. 312.）

- 〔4〕「私はブルジョア経済のシステムを次の順序で、すなわち、資本・土地所有・賃労働、国家・対外商業・世界市場、という順序で考察する。はじめの3項目で私は、近代ブルジョア社会が分かれている3大階級の経済的生活諸条件を研究する。他の3項目のあいだの関連は一目瞭然である。』（『経済学批判 第1分冊』、「序言」。MEGA<sup>®</sup> II/2, S. 99. 『資本論草稿集』③, 203 ページ。）
- 〔5〕「篇別区分〔Eintheilung〕は明らかに次のようになされるべきである。すなわち、1) 一般的抽象的諸規定。それらはしたがって多かれ少なかれすべての社会諸形態に通じるが、それも以上に説明した意味で。2) ブルジョア社会の内的編制〔Gliederung〕をなし、また基本的諸階級がその上に存立している諸範疇。資本、賃労働、土地所有。それら相互間の連関。都市と農村。3大社会階級。これら3階級のあいだの交換。流通。信用制度（私的）。3) ブルジョア社会の国家の形態での総括。自己自身にたいする連関での考察。「不生産的」諸階級。租税。国債。公信用。人口。植民地。移民。4) 生産の国際的関係。国際的分業。国際的交換。輸出入。為替相場。5) 世界市場と恐慌。』（『経済学批判要綱』。MEGA<sup>®</sup> II/1.1, S. 43. 『資本論草稿集』①, 62 ページ。）
- 〔6〕「交換価値、貨幣、価格が考察されるこの第1の項目〔Abschnitt〕では、諸商品はつねに、目の前にあるものとして現われる。形態規定は単純である。われわれは、諸商品が社会的生産の諸規定を表現して

いることを知ってはいるが、しかし社会的生産そのものは前提である。しかし諸商品はこの規定で措定されてはいない。それで実際には、最初の交換は、生産の全体をとらえることも規定することもない余剰の交換として現われるにすぎない。それは、交換価値の世界の外部にあるなんらかの総体的生産の既存の過剰物なのである。発展した社会においてもなお、この交換価値の世界は、そのように、直接的に目の前にある商品世界として、表面に現われ出てくる。しかし交換価値の世界は、自己自身をつうじて、自己をのりこえて、生産諸関係として措定されている経済的諸関係を指ししめす。それゆえ、生産の内的な編制〔Gliederung〕が第2篇をなし、国家における総括が第3篇をなし、国際的関係が第4篇をなし、世界市場が終篇をなす。この世界市場の篇では、生産は総体性として措定されており、同様に生産の諸契機のいずれもが措定されている。しかしながら同時に、この篇ではすべての矛盾が過程に登場する。世界市場はの場合またしても、同様に全体の前提をなし、全体の担い手をなしている。そのさい恐慌は、前提をのりこえることへの全般的指示であり、新しい歴史的姿態の受容への促迫である。」（「経済学批判要綱」。MEGA® II/1.1, S. 151-152. 『資本論草稿集』①, 252-253 ページ。）

- 〔7〕「I. 1) 資本の一般的概念。—— 2) 資本の特殊性。すなわち、流動資本。固定資本。（生活手段としての、原料としての、労働用具としての資本。） 3) 貨幣としての資本。II. 1) 資本の量。蓄積。—— 2) それ自身で測られた資本。利潤。利子。資本の価値。すなわち利子および利潤としてのそれ自身から区別された資本。 3) 諸資本の流通。  
α) 資本と資本との交換。資本と収入との交換。資本と諸価格。β) 諸資本の競争。γ) 諸資本の集中〔Concentration〕。III. 信用としての資本。IV. 株式資本としての資本。V. 貨幣市場としての資本。VI. 富の源泉としての資本。資本家。次に、資本のあとには、土地所有が論じられるべきであろう。土地所有のあとには賃労働。この三つがす

べて前提されたうえで、こんどはその内的総体性において規定された流通として、諸価格の運動。他方では、生産がその三つの基本諸形態と流通の諸前提のかたちで措定されたものとしての、三つの階級。次には、国家。(国家とブルジョア社会。——租税、または不生産的諸階級の存在。——国債。——人口。——外側にむかっての国家、すなわち、植民地。外国貿易。為替相場。国際的鑄貨としての貨幣。——最後に世界市場。ブルジョア社会が国家をのりこえて押しひろがること。恐慌。交換価値のうえにうちたてられた生産様式と社会形態の解体。個人的労働を社会的労働として、またその反対に、社会的労働を個人的労働として実在的に措定すること。)(「経済学批判要綱」。MEGA® II/1.1, S. 187.『資本論草稿集』①, 310-311 ページ。)

- [8] 「資本。I. 一般性 —— 1) a) 貨幣からの資本の生成。b) 資本と労働 (他人の労働によって媒介された)。c) 資本の諸要素, それが労働にたいしてもつ関係にしたがって分解されたもの (生産物。原料。労働用具)。2) 資本の特殊化。a) 流動資本。固定資本。資本の流通。3) 資本の個別性。資本と利潤。資本と利子。利子および利潤としてのそれ自身から区別された、価値としての資本。

II. 特殊性 —— 1) 諸資本の蓄積。2) 諸資本の競争。3) 諸資本の集中 [Concentration] (同時に質的な区別でもあり、また資本の大きさと作用の尺度でもある、資本の量的な区別)。

III. 個別性 —— 1) 信用としての資本。2) 株式資本としての資本。3) 貨幣市場としての資本。貨幣市場では、資本はその総体性において措定されている。そこでは資本は、価格を規定するもの、働き口を与えるもの [*Arbeitgebend*]、生産を規制するもの、一言で言えば、生産源泉である。)(「経済学批判要綱」。MEGA® II/1.1, S. 199.『資本論草稿集』①, 329 ページ。)

- [9] 「利潤をもたらす資本は、現実の資本であり、自己を再生産すると同時にまた自己を累加しつつあるものとして措定された価値であり、

しかも、同じままにとどまる前提として、自己によって指定された剰余価値としての自己自身から区別されている。これにたいして、利子をもたらす資本は、利潤をもたらす資本の純粋に抽象的な形態である。資本が、その価値〔の大きさ〕に応じて（これには生産力の一定の段階が前提される）利潤をもたらすものとして指定されていることによって、商品が、すなわち貨幣という形態で指定されている商品が（自立化した価値という、言い換えれば——いまではそう言うことができるが——実現された資本という、この商品にふさわしい形態で指定されている商品が）、資本として流通にはいることができる。資本が資本として商品になることができるのである。この場合には資本は利子つきで貸し出される資本である。資本の流通の——あるいは資本が経る交換の——形態は、その場合、これまでに考察された形態とは独自の異なるものとして現われる。これまでわれわれは、資本が商品の規定においても貨幣の規定においても自己を指定することを見てきた。しかしこのことが行なわれるのは、商品と貨幣とが資本の循環の契機として現われ、資本がかわるがわる商品と貨幣として自己を実現していくかぎりにおいてでしかない。商品および貨幣は、消えては、たえずふたたび生みだされる、資本の存在諸様式であり、資本の生活過程の諸契機にすぎない。といて、資本としての資本が、それ自身で流通の契機となることはなかった。資本そのもの〔が流通の契機となるのは〕、商品として〔であった〕。商品が売られたのは資本としてではなかったし、貨幣も資本として〔買ったの〕ではなかった。ひとこと言えば、商品も貨幣も——そして厳密に言えば、われわれが妥当な形態と見なさなければならぬのは後者だけであるが——、利潤をもたらす価値として流通にはいったのではなかったのである。」（『経済学批判要綱』。MEGA® II/1.2, S. 738. 『資本論草稿集』②, 805-806 ページ。）

[10] 「利子のところでは二つのことが考察されるべきである。

第1に、利子と利潤とへの利潤の分割。(イギリス人はこれら両者を合わせて、総利潤 [gross profit] と呼ぶ。)この区別は、貨幣資本家 [monied capitalist] から成る一階級が産業資本家から成る一階級に対立するようになると、感じられるもの、だれにでもわかるものとなる。第2に、資本そのものが商品となる、言い換えれば、商品(貨幣)が資本として売られる。これはたとえば、資本が、他のすべての商品と同様に、その価格を需要供給に合わせることを意味する。つまり、需要供給が利子率を規定するのである。だからここで、資本としての資本が流通のなかにはいるのである。

貨幣資本家と産業資本家とが二つの特殊的な階級を形成しうるのは、ただ、利潤が収入の二つの分枝に分離していくことができるからでしかない。二種類の資本家と言えば、これはたんに事実を表現したものにすぎないが、資本家の二つの特殊的階級が成長することができるためには、そのための基礎となる分裂が、すなわち、収入の二つの特殊の形態への利潤の分離が、現に生じていなければならない。

……賃金と利潤——必要労働と剰余労働——のあいだには、ある自然的な関係 [natural relation] が存在する。しかし、利潤と利子とのあいだには、収入のこれら相異なる形態のもとに配置されるこれら二つの階級のあいだの競争によって決定される関係以外に、なんらかの関係があるだろうか。だが、この競争が存在するのには、そしてこの二つの階級が存在するのには、利潤と利子とへの剰余価値の分割がすでに前提されているのである。その一般性において考察された資本は、けっしてたんなる抽象ではない。一国民の総資本を、たとえば総賃労働(あるいはまた土地所有)との区別において考察するとき、あるいは、資本を他のある階級と区別されるある階級の一般的経済的土台として考察するとき、私は資本をその一般性において考察しているのである。それはちょうど、私がたとえば、人間を生理学的に獣と区別して考察する場合のようなものである。利潤と利子との現実的な区

別は、産業資本家階級にたいする貨幣資本家階級〔moneyed class of capitalists〕の区別として存在している。しかしこうした二つの階級が対立しうるのには、つまり資本家たちの二重の存在は、資本によって生みだされた剰余価値の分離〔Diremtion〕を前提するのである。」（『経済学批判要綱』。MEGA® II/1.2, S. 714-715. 『資本論草稿集』②, 752-754 ページ。）

- [11] 「貨幣の第3の形態、すなわち流通にたいして否定的に関わる自立的な価値としての貨幣形態は、資本ではあっても、商品として生産過程から出て、ふたたび交換にはいって貨幣になる、という資本ではない。そうではなくて、自己自身に連関する価値という形態において商品となり流通にはいる、という資本である。（資本と利子。）この第3の形態は、それ以前の諸形態にある資本を前提し、また同時に、資本から特殊的諸資本への、実在的諸資本への移行をなすものである。というのは、いまやこの最後の形態では、資本はその概念上すでに、自立的に存立する二つの資本に分かれるのだからである。二者〔die Zweiheit〕が与えられれば、次には多者〔die Mehrheit〕一般が与えられる。この展開は、このようにして進んでいくのである〔Such is the march of this development〕。」（『経済学批判要綱』。MEGA® II/1.2, S. 358-359. 『資本論草稿集』②, 85-86 ページ。）

- [12] 前出の引用注〔3〕を見よ。

- [13] 「資本の必然的傾向は、流通時間のない流通であり、そしてこの傾向は、信用と資本のもろもろの信用の仕組み〔Credit contrivances〕との基礎規定である。他方ではさらに信用は、資本が、自己を個別諸資本から区別して措定しようと、すなわち、自己の量的制限から区別された資本としての個別的資本を措定しようと努めるときに資本がとる形態でもある。しかし、資本がこの方向で成り上がる最高の結果は、一方では架空資本〔*fictitious Capital*〕である。他方では信用は、ただ、集中〔Concentration〕の新たな要素としてのみ、すなわち、集

申していく〔centralisierend〕個別的諸資本のかたちで諸資本を絶滅していきの新たな要素としてのみ現われる。流通時間はある面からみれば、貨幣として対象化されている。信用が企てるのは、貨幣をたんに形態契機としてのみ措定しようとすることであり、その結果貨幣は、それ自身が資本であること、すなわち価値であることなしに、形態転換を媒介するようになる。これは流通時間のない流通の一つの形態である。貨幣はそれ自体が流通の産物である。資本がどのようにして信用のかたちで流通の新たな諸産物を創造するかは、のちに明らかになるであろう。だが、資本の努力が一方では流通時間のない流通であるのにたいして、他方ではそれは、流通時間と流通との過程を媒介するさまざまな機関のかたちで、流通時間そのものに生産時間の価値を、総じて価値を与えようとする企てであり、流通時間のすべてを貨幣として、またさらに進んだ規定では資本として措定しようとする企てである。これが信用の他の一面である。すべては同一の源泉から発しているのである。流通のあらゆる必要条件、すなわち貨幣、商品の貨幣への転化、貨幣の商品への転化、等々、これらは、外見上まったく異質なさまざまな形態をとってはいるが、すべて流通時間に帰せられる。この流通時間を短縮するための機械装置はそれ自体が流通時間に属する。生産時間においては資本は自己を再生産するのであって、このなかでは資本は、ただ形態上の変換だけを通過しなければならない完成した資本としてではなくて、過程を進行しつつある、創造的な、自己の生きた魂を労働から吸収しつつある資本であり続けるのであるが、流通時間は、このような生産時間とは区別して、資本が資本として行なう独自の運動の時間と見なすことができる、資本の時間なのである。

労働時間と流通時間との対立は、とりわけ通貨の件等々がここにはいつてくるかぎりでは、信用論〔Lehre vom Credit〕をそっくり含んでいる。〔「経済学批判要綱」。MEGA® II/1.2, S. 543.『資本論草稿

集』②, 421-423 ページ。)

- [14] 「これまでに述べたすべてのことから、流通は資本の本質的な過程として現われるということがわかる。生産過程は、商品が貨幣に転化される以前には、新たに開始されることができない。過程の持続的な連続性、すなわち、価値がある形態から他の形態へと、あるいは過程のある局面から他の局面へと、妨げられることなく、よどみなく移行することは、それ以前のあらゆる生産形態の場合とはまったく違った程度に、資本にもとづく生産にとっての根本条件として現われる。他方では、この連続性の必然性が措定されているのに、それらの局面は、特殊な相互に無関心な諸過程として、時間的にも空間的にもばらばらになる。そこで、資本にもとづく生産にとっては、その本質的な条件が、すなわち、生産の全過程を構成するさまざまな過程の連続性がつくりだされるかどうか、偶然的なこととして現われる。資本そのものによるこの偶然性の止揚が信用である。(信用はさらに別の諸側面をもっているが、この側面は生産過程の直接的本性に由来するものであり、したがってまた信用の必然性の基礎である。) だからこそ、いくらかでも発展した形態での信用は、以前のいかなる生産様式においても現われることがないのである。以前の諸状態においても貸借は行なわれたし、高利は、資本の大洪水以前の諸形態のうちの最古の形態でさえある。しかし、貸借が信用を構成しないのは、もろもろの労働が産業的労働あるいは自由な賃労働を構成しないのとまったく同様である。本質的な、発展した生産関係としては、信用は、歴史的にもまた、資本あるいは賃労働にもとづく流通においてのみ現われるのである。(貨幣そのものが、さまざまな生産諸部門で必要とされる時間の不均等性を、それが交換の妨げとなるかぎり、止揚するための一形態である。) 高利は、そのブルジョア化された、すなわち資本に適合させられた形態では、それ自身信用の一形態であるけれども、その前ブルジョア的形態では、むしろ信用の欠如の表現である。」

(「経済学批判要綱」。MEGA<sup>®</sup> II/1.2, S. 435. 『資本論草稿集』②, 209-210 ページ。)

〔15〕 前出の引用注〔13〕を見よ。

〔16〕 「ところで、先に進むまえに、なお次のことを述べておこう。特殊  
 的諸資本から区別される資本一般は、たしかに 1) 一つの抽象としてのみ現われるのであるが、恣意的な抽象ではなくて、富の他のすべての形態あるいは生産（社会的な）が発展して行く諸様式とは区別される資本の種差〔differentia specifica〕をとらえるような抽象である。これは、どの資本それ自体にも共通の、言い換えれば一定額のどの価値をも資本たらしめるような、諸規定である。そして、この抽象の内部での諸区別も、同様に抽象的な特殊性であって、これらの特殊性がどんな種類の資本をも、それがこれら特殊性の肯定または否定であることによって特徴づけるのである（たとえば固定資本または流動資本）。  
 2) だが、特殊的な実在的諸資本そのものから区別される資本一般は、一つの実在的な存在である。このことは、普通の経済学によっても、理解されてはいないにせよ、承認されているのであり、また普通の経済学の、平均化にかんする学説等々にとっての非常に重要な契機をなしている。たとえば、諸銀行に蓄積され、あるいは諸銀行によって配分される、しかもリカードウの言うように、まったくみごとに生産の要求に比例して分配される資本は、個々の資本家たちに属するものであるにもかかわらず、資本だというその基本的形態〔*elementarische Form*〕において、この一般的形態における資本となっているのである。同様にそれは、貸付等々をとおして、異なった国々のあいだに一つの水準を形成する。それゆえたとえば、資本は自己増殖するためには自己を二重に措定しなければならず、この二重の形態で自己を二重に増殖しなければならない、ということが資本一般の法則であるのならば、たとえば、ほかの国民にたいしてはすぐれて〔*par excellence*〕資本を代表しているような特殊な一国民の資本が、自己を

増殖できるように、第三国に貸し出されなければならないであろう。自己自身にたいして、他人のものにたいする様態で連関する、という二重措置は、この場合にはすこぶる実在的である。それゆえ一般的なものは一方ではたんに思考上の種差にすぎないが、この種差は同時に、特殊なものの形態および個別なものの形態と並ぶ一つの特殊な実在の形態でもあるのである。(この点には、のちほど立ち返ろう。これは、経済学的な性格よりも論理的な性格をもつものではあるが、にもかかわらず、われわれの研究の進展のなかでたいへん重要な意味をもつことになる。代数学でもそうである。たとえば、 $a$ ,  $b$ ,  $c$  は総じて数である、つまり数一般である。がさらにそれらは、 $a/b$ ,  $b/c$ ,  $c/b$ ,  $c/a$ ,  $b/a$ , 等々にたいする整数である。それでもこれら〔分数〕はやはり、整数を一般的要素として前提しているのである。)(「経済学批判要綱」。MEGA® II/1.2, S. 359. 『資本論草稿集』②, 86-87 ページ。)

(17) 前出の引用注〔13〕を見よ。

(18) 前出の引用注〔3〕を見よ。

(19) 「競争には、価値と剰余価値とについて立てられた基本法則とは区別して展開される基本法則がある。それは、価値が、それに含まれている労働またはそれが生産されている労働時間によってではなく、それが生産される労働時間、すなわち再生産に必要な労働時間によって規定されている、という法則である。最初の法則が覆されたかのようにみえるにもかかわらず、実はこのことによって始めて、個々の資本が資本一般〔Capital überhaupt〕の諸条件のなかに置かれる。だが、資本それ自体の運動によって規定されたものとしての必要労働時間は、こうして始めて措置されているのである。これが競争の基本法則である。需要、供給、価格（生産費用）が、それに続く形態規定である。市場価格としての価格、または一般的価格。それから、一つの一般的利潤率の措置。そのさい、市場価格によって諸資本はさま

ざまの部門に配分される。生産費用の引き下げ、等々。要するに、ここではいっさいの規定が、資本一般〔Capital im Allgemeinen〕におけるのとは逆となって現われる。さきには価格が労働によって規定されたが、ここでは労働が価格によって規定される、等々、等々。まさに個別諸資本の相互間の作用こそ、それらが資本として振舞わなければならないようにさせるのであり、個別的諸資本の外見的には独立した作用と個別的諸資本の無秩序な衝突こそが、それらの一般的法則の指定なのである。市場は、ここで、さらに別の意義をうけとる。諸資本の個別的資本としての相互間の作用は、こうしてまさに、諸資本の一般的資本としての指定となり、また個別諸資本の外見的独立性と自立的存続との止揚となる。この止揚がさらに著しく生じるのは、信用においてである。そしてこの止揚の行きつく、だが同時に、資本にふさわしい形態にある資本の終局的指定でもある窮極の形態は、株式資本である。』（『経済学批判要綱』。MEGA® II/1.2, S. 541. 『資本論草稿集』②, 419 ページ。）

- [20] 「利子生み資本が資本主義的生産に特有かつ相応な形態を受け取るのは信用においてである。信用は、資本主義的生産様式そのものによって創造された形態である。……費用価格への価値の均等化はただ次のことによつてのみ行なわれる。すなわち、個別的資本は階級の総資本の可除部分として機能し、他方、階級の総資本は生産上の必要に応じてさまざまな特殊的部分に配分される、ということによってである。このことは信用によつて行なわれる。信用によつて、この均等化が可能にされ容易にされるだけでなく、資本の一部が——貨幣資本〔moneyed capital〕の形態のもとで——実際にこの階級全体の仕事の共同材料として現われるのである。これが信用の一つの意義である。もう一つの意義は、流通過程で自己が経なければならない諸変態を短縮しようとする資本の不断の試み、すなわち、流通期間や資本の貨幣への転化等々を先取りし、こうして自己自身の被制限性に対抗しよう

とする資本の不断の試みである。最後にこうして、一つには、資本に転化するという意味ではなくて剰余価値を資本の形態で供給するという意味での蓄積するという機能が一つの特殊的階級に負われ、一つには、社会のこの意味でのすべての蓄積が資本の蓄積となって産業資本家たちに用立てられる。社会の無数の点で個々別々に行なわれるこの操作は、集中されて〔concentriert〕大きなもろもろの貯水池に集められる。こうして貨幣が、変態中の商品の凝固として遊休しているかぎりには、資本に転化させられるのである。」（『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.4, S. 1514-1515. 『資本論草稿集』⑦, 503-504 ページ。）

[21] 「信用制度についてこれまでわれわれが一般的に述べる機会をもったのは、次のことであった。

I) 利潤率の均等化を媒介するために、すなわち全資本主義的生産の基礎をなすこの均等化の運動を媒介するために、信用制度が必然的に形成されること。

II) 流通費の節減。A) 1つの主要流通費は、自己価値であるかぎりでの貨幣そのものである。信用によって三つの仕方では節約される。a) 取引の大きな一部分で貨幣が全然用いられないことによって。b) 金属通貨または紙券通貨の流通が加速されることによって。（これは、部分的には、cで述べるべきことと一致する。すなわち、一面では加速は技術的である。すなわち、実体的な商品流通が、あるいは事業取引の量が変わらないのに、より少ない総量の銀行券が同じ役だちをするのである。このことは銀行制度の技術と関連している。他面では、信用は商品変態の速度を速め、したがってまた貨幣流通の速度を速める。）c) 金貨幣が紙券で置き換えられること。B) 信用によって、流通または商品変態の、さらには資本の商品変態のさまざまな段階が速められること（したがって再生産過程一般が速められること）。{他面では信用は、購買と販売という行為をかなり長いあいだ分離しておくことを許し、したがってまた投機の基礎として役だつ。} 準備金の縮

小。これは二つの面から考察することができる。A) では、通貨の減少として、B) では、資本のうちの絶えず貨幣形態で存在しなければならない部分の削減として。

Ⅲ) 株式会社の形成。これによって第1に、生産規模のすぎまじい拡張〔が生じ〕、そして私的諸資本には不可能な諸企業〔が生まれる〕。同時に、従来は政府企業〔だった〕ような諸企業が会社企業〔社会企業〕になる。第2に、即自的には社会的生産様式を基礎とし、生産手段および労働力の社会的集中〔Concentration〕を前提している資本が、ここでは直接に、私的資本に対立する社会資本〔会社資本〕（直接にアソシエイトした諸個人の資本）の形態を与えられており、資本の諸企業が、私企業に対立する社会企業〔会社企業〕として〔現われる〕。それは、資本主義的生産様式そのものの限界の内部での、私的所有としての資本の止揚である。第3に、現実には機能している資本家が（他人の資本の）たんなるマネジャーに転化し、資本所有者はたんなる所有者、たんなる貨幣資本家〔*monied capitalists*〕に転化すること。彼らの受ける配当が利子と企業利得とに、すなわち総利潤に等しい場合でも（というのは、マネジャーの賃金は一種の熟練労働のたんなる賃金であるか、またはそうなるはずのものであって、どの種類の労働とも同様に、労働市場でしかるべき水準に落ちつくのだから）、この総利潤は、もはや利子の形態で、すなわち資本所有のたんなる報酬として、受け取られるにすぎないのであって、この資本所有が現実の再生産過程での機能から分離されることは、（マネジャーの）機能が資本所有から分離されるのとまったく同様である。こうして、利潤は（もはや、その一方の部分、すなわち借り手の利潤からその正当化の理由を引きだす利子だけではなく）、他人の剰余労働のたんなる取得として現われるのであるが、このことは生産手段が資本に転化することから、すなわち、生産手段が、マネジャーから最下級の賃労働者に至るまでのすべてを含む現実の生産者に対して他人の所有と

して疎外され、対立することから生じるのである。株式会社では機能と資本所有とが、したがってまた労働と生産手段および剰余労働の所有とが、まったく分離されている。資本主義的生産が最高に発展してもたらしたこの結果こそは、資本が生産者たちの所有に、といっても、もはや個々別々の生産者たちの私有としての所有ではなく、アソシエイトした生産者としての彼らによる所有としての所有に、直接的な社会所有としての所有に、再転化するための必然的な通過点である。それは他面では、資本所有と結びついた再生産過程上のいっさいの機能の、アソシエイトした生産者たちのたんなる機能への転化、社会的機能への転化である。——さらに先に進む前に、次のような経済学的に重要な点を注意しておかなければならない。すなわち、利潤はここでは純粹に利子という形態を取るのだから、このような企業は、それらがたんなる利子しかもたらさないような場合にも可能である、ということである。そしてこれは、一般的利潤率の低下を阻止する原因の1つなのである。というのは、不変資本が可変資本にたいしておそろしく大きな割合をなしているこれらの企業が、必ずしも一般的利潤率の均等化に参加しないからである。——これは、資本主義的生産様式の内部での資本主義的生産様式の止揚であり、したがってまた自分自身を止揚するような矛盾であって、この矛盾は、一見して明らかに、生産様式の新たな形態へのたんなる通過点として現われるのである。それはさらに、現象においても、このような矛盾として現われる。それはある種の諸部面では独占を成立させ、したがってまた国家の干渉を誘い出す。それは、新しい金融貴族を再生産し、企業企画屋や重役（たんなる名目だけのマネジャー）やの姿を取った新しい寄生虫一味を再生産し、株式取引や株式発行等々についての思惑と詐欺との全制度を再生産する。私的所有によるコントロールのない私的生産。

株式制度を度外視しても——株式制度は資本主義的システムそのものの基礎の上での資本主義的私的産業のひとつの止揚であって、それ

が伸張して新たな生産部面をとらえて行くのにつれて私的産業をなくして行く——、信用は、個々の資本家または資本家とみなされている人に、他人の資本や他人の所有の（それによってまた他人の労働の）——相対的に言って——絶対的な処分権を与える。自分の資本ののではなくて社会的な資本の処分権は、彼に社会的労働の処分権を与える。資本そのものまたは「資本とみなされているもの」は、もはや信用という上部建築のための土台になるだけである。（このことは、国富の大部分がその手を通る卸売業にはとくによくあてはまる。）いっさいの規範が、また、多少とも資本主義的生産様式の内部でまだ正当とされてきたもろもろの弁明理由が、ここではなくなってしまう。彼が賭けるものは、社会的所有であり、彼の所有ではない。また同様に、節約という文句もばかげたものになる。というのは、他人が彼のために節約しなければならぬのだからである。また彼の奢侈が節欲という文句をあざ笑う。資本主義的生産のより未発展な段階ではまだなにか意味のある諸観念が、ここではまったく無意味になる。成功も失敗も、ここでは同時に集中〔Concentration〕に帰し、したがってまた法外きわまりない規模での収奪に帰する。収奪はここでは直接生産者から小中の資本家そのものにまで及ぶ。この収奪は資本主義的生産様式の出発点であり、この収奪の実行はこの生産様式の目標であるが、しかし最後にはすべての個人からの生産手段の収奪〔に終わる〕。生産手段は、社会的生産の発展につれて、私的生産手段であることをも私的産業の生産物であることをもやめ、それはもはや、それがアソシエイトした生産者たちの社会的生産物であると同様、アソシエイトした生産者たちの手にある生産手段、したがって彼らの社会的所有物にほかならない。ところがこの収奪は、資本主義的システムそのものの内部では、対立的に、少数者による社会的所有の横奪として現われるのであり、また信用は、これらの少数者にますます純粋な山師の性格を与えるのである。所有はここでは株式の形で存在するのだから、そ

の運動そのもの、つまりその移転は取引所投機のまったくの結果となるのであって、そこでは小魚は鮫に呑みこまれ、羊は狼男に呑みこまれてしまう。株式制度のうちには、すでに、この形態に対する対立物があるが、しかし株式制度それ自身は、資本主義的な制限の内部で、社会的な富と私的な富という富の性格のあいだの対立を新たにつくり上げるのである。——労働者たち自身の協同組合工場は、古い形態の内部では、古い形態の最初の突破である。といっても、もちろん、それはどこでもその現実の組織では既存の制度のあらゆる欠陥を再生産しているし、また再生産せざるをえないのではあるが。しかし、資本と労働との対立はこの協同組合工場の内部では止揚されている。たとえば、はじめはただ、労働者たちがアソシエーションとしては自分たち自身の資本家であるという形態、すなわち生産手段を自分たち自身の労働の価値増殖のために用いるという形態によってでしかないとはいえ。この工場が示しているのは、ある生産様式から、物質的生産諸力とそれに対応する社会的生産諸形態とのある発展段階で、新たなある生産様式が、自然的に形成されてくるのだ、ということである。協同組合工場は、資本主義的生産様式から生まれる工場制度がなければ発展できなかったし、また資本主義的生産様式から生じてくる信用システムがなくてもやはり発展できなかった。信用システムは、資本主義的私的企業がだんだん資本主義的株式会社に転化して行くための主要な基礎をなしているのであるが、それはまた、多かれ少なかれ国民的な規模で協同組合企業がだんだん拡張して行くための手段をも提供するのである。資本主義的株式企業も、協同組合工場と同様に、資本主義的生産様式からアソシエイトした生産様式への過渡形態とみなしてよいのであって、ただ、一方では対立が消極的に、他方では積極的に止揚されているのである。」(『資本論』第3部第1稿。MEGA<sup>®</sup> II/4.2, S. 501-504. 拙稿「資本主義的生産における信用の役割」の草稿について、『経済志林』第52巻第3・4号、(25)-(40)ページ。[MEW,

Bd. 25, S. 451-456.))

- [22] 「銀行システムは、形態的な組織化および集中〔Centralisation〕から見て、およそ資本主義的生産様式がもたらす、最も人工的で最も発達した産物である。それだからこそ、イングランド銀行のような一つの機関〔Institut〕が商業や産業にたいして巨大な力を揮うのである。といっても、商業や産業の現実の運動がまったくイングランド銀行の領域の外部にあることに変わりはないのであって、この運動にたいするイングランド銀行の関わりは受動的なものではあるが。それとともにたしかに生産手段の社会的な規模での一般的な記帳可能性〔Comptabilität〕や配分の形態が与えられているが、しかしまた、ただ形態だけである。すでに見たように、個別的資本家、特殊的資本の平均利潤は、この資本が搾取する剰余労働によって規定されているのではなく、総資本が搾取する社会的な剰余労働の分量によって規定されているのであって、特殊的資本はそのなかから、ただこの総資本のなかで占める割合に応じて自分の配当を引き出すだけである。資本のこの「社会的」性格は、信用・銀行システムの発展によってはじめて媒介され、実現されるのである。他方では、これはさらに先に進む。信用・銀行システムは、産業資本家や商業資本家に、社会の処分可能でまだ能動的に充用されていないあらゆる資本を用立てるのであり、したがってこの資本の貸し手もその充用者もこの資本の「所有者」でもなければ生産者でもない。信用・銀行システムはこのようにして資本の私的性格を止揚するのであり、こうして即自的に、しかしまたただ即自的にのみ、資本そのものの止揚を含んでいるのである。

銀行制度によって資本の配分は、一つの特殊的業務として、社会的な機能として私的資本家や高利貸の手から取り上げられている。しかし、これによって同時に銀行制度は、資本主義的生産をそれ自身の諸制限を乗り越えて進行させる最も能動的な〔aktiv〕手段となり、また恐慌、思惑、等々の最も有効な媒介物の一つとなるのである。

さらに、銀行制度は、さまざまな形態の流通する信用を貨幣に代位させることによって、貨幣は実際には労働とその生産物との社会的な性格の一つの特殊の表現にはかならないということ、しかしこの性格は私的生産の土台に対立するものとしてつねに結局は一つの物として、他の諸商品と並ぶ特殊の商品として、現われざるをえないということを示している。最後に、資本主義的生産様式からアソシエイトした労働の生産様式への過渡期に信用システムが強力な槓杆として役だつてであろうということは、少し疑う余地はない。とはいえ、それが役立つのは、ただ、この生産様式そのものの他の大きな有機的な諸変化〔changes〕との関連のなかの一契機としてのみである。これに反して、社会主義的な意味での信用・銀行制度の奇跡的な力についてのもろもろの幻想は、資本主義的生産様式とその形態の一つとしての信用制度とについての完全な無知から生まれるのである。生産手段が資本に転化することをやめれば（このことのうちには私的土地所有の止揚も含まれている）、信用そのものにはもはやなんの意味もないのであって、ちなみにこのことはサン・シモン主義者たちでさえも見抜いていたことである。他方、資本主義的生産様式が存続するかぎり、利子生み資本はその諸形態の一つとして存続する（そして事実、これが信用システムの土台となっているのである）。ただ、商品生産は存続させておいて貨幣を止揚したいと思った、あの「人気取り著述家〔sensational writer〕」プルドンだけが、無償信用という、この小ブルジョア的立場のはかない願望という奇怪なものを、夢想することができたのである。これがすべての空虚な山師かつほら吹きの本래の戦場なのである。」（『資本論』第3部第1稿。MEGA® II/4.2, S. 661-663. [MEW, Bd. 25, S. 620-621.]）

[23] 前出の引用注〔13〕を見よ。

[24] 「私は前に、どのようにして単純な商品流通から支払手段としての貨幣の機能が形成され、それとともにまた商品生産者や商品取扱業者

のあいだに債権者と債務者との関係が形成されるか、を明らかにした。商業が発展し、ただ流通だけを考えて生産を行なう資本主義的生産様式が発展するにつれて、信用システムのこの自然発生的な基礎は拡大され、一般化され、仕上げられていく。だいたいにおいて貨幣はここではただ支払手段としてのみ機能する。すなわち、商品は、貨幣と引き換えにではなく、書面での一定期日の支払約束と引き換えに売られるのであって、この支払約束をわれわれは手形という一般的範疇のもとに包括することができる。これらの手形は、その支払満期にいたるまで、それ自身、支払手段として流通するのであり、またそれらが本来の商業貨幣をなしている。それらは、最終的に債権債務の相殺によって決済されるかぎりでは、絶対的に貨幣として機能する。というのは、この場合には貨幣へのそれらの最終的転化が生じないからである。生産者や商人のあいだで行なわれるこれらの相互的な前貸が信用制度の本来の基礎をなしているように、彼らの流通用具である手形が本来の信用貨幣、銀行券流通等々の基礎をなしているのであって、これらのものの土台は、貨幣流通（金属貨幣であろうと国家紙幣であろうと）ではなくて、手形流通なのである。

信用制度の他方の側面は貨幣取扱業の発展に結びついている。貨幣取扱業の発展は、もちろん、資本主義的生産様式一般のなかで進む商品取扱業の発展と歩調をそろえて進んでいく。

すでに前章で見たように、商人等々の準備金の保管、貨幣の払い出しや受け取りの技術的諸操作、国際的支払（したがってまた地金取引）は、貨幣取扱業者の手に集中される〔concentrirt〕。貨幣取扱業というこの土台のうえで信用制度の他方の側面が発展し、〔それに〕結びついている、——すなわち、貨幣取扱業者の特殊的功能としての、利子生み資本あるいは貨幣資本〔monied capital〕の管理である。」（『資本論』第3部第1稿。MEGA® II/4.2, S. 469–471. 拙稿「信用と架空資本」の草稿について（中）」、『経済志林』第51巻第3号、6–13

ページ。〔MEW, Bd. 25, 413-416.〕)

- [25] 「こういうわけで、第1の転化の基礎の上で第2の転化が起こるのであって、この第2の転化は、もはや形態だけではなく、形態とともに実体そのものに関係するのであり、換言すれば利潤の絶対量——つまり利潤の形態で現われる剰余価値のそれが変わるのである。」(『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.5, S. 1626. 『資本論草稿集』⑧, 133 ページ。)
- [26] 「最初の転化で剰余価値が形式的に生産物の価値のうち前貸資本の価値を越える超過分として決定されるのと同じように、ここでは、実質的に、資本全体の総生産物のうち前貸資本の総価値を越える価値超過分にたいする前貸資本の分けまえが、この前貸資本の価値に比例して、決定されるのである。このような計算を遂行させる動因は、諸資本のそれ自身のあいだでの競争である。」(『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.5, S. 1628. 『資本論草稿集』⑧, 136-137 ページ。)
- [27] 「第2の転化は、資本そのものの性質から生じる最初の転化の必然的な結果であり、これによって剰余価値は、生産費すなわち前貸資本の価値を越える価値超過分に転化させられる。最初の場合には剰余価値の絶対量と利潤のそれとは等しいが、しかし利潤率は剰余価値率よりも小さい。第2の場合には総剰余価値の絶対量と総利潤のそれとは等しいが、しかし平均利潤率は剰余価値の平均率（すなわち総資本に含まれている可変資本の総価値にたいする剰余価値の割合）よりも小さい。

最初の場合には転化は形式的であり、第2の場合には同時に実質的でもある。というのは、今では個々の資本に割り当たる利潤は、その資本によって生産された剰余価値とは事実上違った大きさであり、その剰余価値よりも大きかったり小さかったりするからである。最初の場合には剰余価値が、この特定の剰余価値を生産する資本の有機的な諸成分を顧慮することなしに、ただ資本の大きさに従ってだけ計算さ

れる。第2の場合には、個々の独立した資本に割り当たる総剰余価値中の取り分の分けまえが、この総剰余価値の生産にたいする個々の独立した資本の機能的な割合を顧慮することなしに、ただその資本の大きさに従ってだけ計算される。

こういうわけで、第2の場合には、利潤と剰余価値とのあいだに、それと同時に商品の価格と価値とのあいだに、本質的な相違が現われる。そのことから、諸商品の現実の価格が——それらの標準価格さえもが、それらの価値と相違するということが生じる。このことをもっと詳しく研究することは、競争の章に属するが、そこでも、商品の価値の変革が、諸商品の標準価格とそれらの価値とのこのような差異とは別に、商品の価格をどのように修正するかということを証明しておくべきである。」(『1861-1863年草稿』。MEGA<sup>®</sup> II/3.5, S. 1629-1630. 『資本論草稿集』⑧, 138-139 ページ。)

[28] 「およそ平均利潤率を問題にすることができるのは、ただ、資本の生産部門が違えば利潤率も違っているという場合だけであって、利潤率が同じであるならば問題にしようがない。

この点のより詳しい考察は競争の章に属する。それにしてもやはり、きわめて重要な一般的なものはここで説明されなければならない。」(『1861-1863年草稿』。MEGA<sup>®</sup> II/3.5, S. 1623. 『資本論草稿集』⑧, 129 ページ。)

[29] 前出の引用注 [27] を見よ。

[30] 「利潤率は、——それが投下資本の特殊的性質によって補正されるということは、いろいろな労働部門の標準〔労働〕日の長さの相違がそれと競合する付随的事情すなわち労働の特殊性などによっていくらか修正されるということに似ているが、そういうことがないかぎりでは——平均よりも高かったりまたはそれよりも低かったりすると、そのような利潤率は、こうしたことが起こる特殊的投下部門における資本の例外的な事態とみなされ、競争によって一般的水準に引き下げ

られるかまたは引き上げられる。というのは、特権を与えられた部門への他の諸資本の移住、または逆の場合には、土着の諸資本——この部門に住みついている諸資本——の同じ部門から外部への移住が起こるからである。それによって、利潤率の水準は、前者の場合には下がり、後者の場合には上がる。剰余利潤、すなわち、個々の資本家が資本投下の特殊な部門（地域）で受ける利潤からのマイナスは、まったくこの考察には属さない。」（『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.5, S. 1623-1624. 『資本論草稿集』⑧, 129-130 ページ。）

- [31] 「『資本と利潤』に関する第3部のうち、一般的利潤率の形成が取り扱われる第2章では、次の諸点を考察するべきである。1. 諸資本の有機的構成の相違。これは、一部には、生産段階から生じるかぎりでの可変資本と不変資本との区別によって、機械や原料とそれらを動かす労働量との絶対的な量的比率によって制約されている。このような区別は、労働過程に関連がある。また、流過程から生じる固定資本と流動資本との区別も考察するべきである。それは、一定の期間における価値増殖を、部面の異なるにつれて相違させる。2. 違った資本の諸部分の価値比率の相違で、それらの資本の有機的構成から生じるのではないところの相違。こうしたことが生じるのは、価値、とくに原料の価値の相違からである。たとえ原料が二つの違った部面で等量の労働を吸収すると仮定しても、そうである。3. これらのいろいろな相違の結果として生じる、資本主義的生産のいろいろに違った部面における利潤率の多様性。利潤率が同じで利潤量が充用資本の大きさに比例するということは、構成などを同じくする諸資本についてのみ正しい。4. しかし総資本については、第1章で展開したことがあてはまる。資本主義的生産においては各資本は、総資本の断片、可除部分として措定される。一般的利潤率の形成。（競争。）5. 価値の生産価格への転化。価値と費用価格と生産価格との相違。} {6. リカードウの理論をさらに取り上げるために。労賃の一般的変動が一般的利潤

率に、したがって生産価格に及ぼす影響。}」(『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.5, S. 1816-1817. 『資本論草稿集』⑧, 460ページ。)

- [32] 「第3篇「資本と利潤」は次のように分けること。1. 剰余価値の利潤への転化。剰余価値率と区別しての利潤率。2. 利潤の平均利潤への転化。一般的利潤率の形成。価値の生産価格への転化。3. 利潤および生産価格に関する A. スミスおよびリカードウの学説。4. 地代。(価値と生産価格との相違の例証。) 5. いわゆるリカードウ地代法則の歴史。6. 利潤率低下の法則。A. スミス, リカードウ, ケアリ。7. 利潤に関する諸学説。シスモンディやマルサスをも「剰余価値に関する諸学説」のうちに入れるべきかどうかの問題。8. 産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本。9. 収入とその諸源泉。生産過程と分配過程との関係に関する問題もここで取りあげること。10. 資本主義的生産の総過程における貨幣の還流運動。11. 俗流経済学。12. 結び。「資本と賃労働」。(『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.5, S. 1861. 『資本論草稿集』⑧, 541ページ。)

- [33] 「こうして諸資本の競争は、それぞれの資本を総資本の部分として取り扱い、またそれに応じて、それぞれの資本が剰余価値の分け前にあずかることを、だからまた利潤を調整しようと努める。競争が多かれ少なかれこのことに成功するのは、利潤率の均等化によってである。(ここでは、競争が個々の部面で特殊的障害に突きあたる諸原因を研究することはできない。)だがこのことは、あからさまにすぎる言い方で言うなら、資本家たちが、自分たちが労働者階級から搾り出す不払労働の分量——またはこの労働分量の諸生産物——を互いのあいだで、特殊的資本が直接に剰余労働を生産するのに比例してではなく、第1にこの特殊的資本が総資本の一つの可除部分をなしている割合に応じて、第2に総資本そのものが剰余労働を生産するのに比例して分配し合おうと努める(だがこの努力が競争なのである)ということにほかならない。資本家たちは、取得した他人の労働の獲物を、平均し

てどの資本家も他の資本家と同じだけの不払労働を取得するように、兄弟的かつ敵対的に分け合う。競争がこの均等化を成し遂げるのは、もろもろの平均価格の調整を通じてである。ところが、これらの平均価格そのものにおいては、ある商品が他の商品よりも大きな利潤率をもたらすということのないように、商品はその価値よりも高く引き上げられたり、その価値よりも低く押し下げられたりするるのである。だから、諸資本の競争は、諸商品の価格をそれらの価値に均等化することによって、一般的利潤率を生みだすのだ、というのはまちがいである。その反対に、諸資本の競争は、諸商品の価値をもろもろの平均価格に転化させることによって、一般的利潤率を生みだすのであり、これらの平均価格ではある商品の剰余価値の一部分が他の商品に移転されているのである、等々。ある商品の価値は、この商品に含まれている労働の、すなわち支払労働プラス不払労働の分量に等しい。ある商品の平均価格は、その商品に含まれている支払労働（対象化された労働または生きた労働）の分量、プラス、不払労働の平均的分け前、に等しい。不払労働のこの平均的分け前は、それがその商品そのものに、この大きさどおり含まれていたのか、いなかったのか、あるいは、その商品の価値に含まれていた不払労働がそれよりも多かったのか少なかったのか、ということにはかかわりがない。ある種の生産諸部面は、それらの価値が上で言う意味での諸平均価格への還元と逆らうような事情のもとで働いていて、競争がこうした勝利を収めることを許さない！、ということはある——このことは、本書の対象に属さない、のちの研究に委ねる——。」（『1861-1863年草稿』。MEGA<sup>®</sup> II/3.3, S. 685-686. 『資本論草稿集』⑥, 26-27 ページ。）

- [34] 「ところで、僕はいま、めちゃくちゃに仕事をしている。そして、奇妙なことだが、僕の脳みそは、周囲のあらゆる惨めさのなかにありながら、これまでの数年よりもよく動いている。僕はこの巻をもっと大きくする。というのも、ドイツの犬畜生は本の価値を体積で測るか

らだ。ついでに言えば、やっとのことで地代の奴〔Grundrentscheiße〕にも決着をつけた（といっても、この部分ではそれを暗示することさえしようとは思っていない）。僕はずっと以前からリカードの理論の完全な正しさについては疑念をもっていたのだが、ついにそのべてんも見つけた。そのほか、すでにこの巻のなかに出てくることについても、僕たちが会わずにいたあいだに、いくつかのちょっとした意外な新しいことを発見した。」（1862年6月18日付エンゲルス宛ての手紙。MEW, Bd. 30, S. 248-249.）

- [35] 「ここで問題なのは、価値および費用価格に関する私の理論の例証として地代の一般的法則を展開することだけである。これにたいして、地代の詳細な説明は、そのときがきて土地所有を論じることになることでもあれば、そのときにはじめて行なうであろう。そういうわけで私は、事柄を複雑にするような事情はすべて遠ざけてきたのである。すなわち、炭鉱や土地種類の位置の影響、同じ炭鉱または同じ土地種類に充用される資本の諸分量のそれぞれの豊度の程度の相違、同じ生産部門の種々の変動が与える地代、つまりたとえば農業の種々の部門の地代の相互の関係、別々の生産部門ではあるが互いに転換できる生産部門が与える地代、たとえば土地が農業から引きあげられて家屋建築用に用いられる場合などの地代の相互の関係、等々がそれである。これらはすべてここには属さない。」（『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.3, S. 907. 『資本論草稿集』⑥, 381-382 ページ。）

- [36] 「僕が、現にやっているように、理論的な仕事を進めることができてきたのは、ほんとうの奇蹟だ。僕はいま、結局のところ、すぐにこの巻のなかに1章を挿入し、地代論を、すなわち以前に立てた一つの命題の「例証」として、持ち込むことをもくろんでいる。くわしく書けば長たらしくて複雑な話だが、それをわずかばかりの言葉で書いてお目にかけるから、君の意見を知らせてくれたまえ。」（1862年8月2日付エンゲルス宛ての手紙。MEW, Bd. 30, S. 263.）

[37] 「第2の部分はいまやとできあがったところです。つまり印刷するために浄書し最後の仕上げをるところまでできています。ほぼ30印刷ボーゲンになるでしょう。これは第1分冊の続きですが、独立して『資本』という表題で刊行され、「経済学批判」というのは副題としてつだけです。実際には、それは第1部第3章となるはずだったもの、つまり「資本一般」を含むだけです。つまり諸資本の競争と信用制度はそこに含まれていません。イギリス人が「経済学原理 [the principles of political economy]」と呼ぶものがこの巻に含まれています。これは(第1の部分とあわせて)核心的部分 (Quintessenz) で、これに続くものの展開は(たとえば社会のさまざまな経済的構造にたいするさまざまな国家形態の関係などを除けば)すでに与えられているものを土台にすればほかの人でも容易になしとげられるでしょう。」(1862年12月28日付クーゲルマン宛ての手紙。MEW, Bd. 30, S. 639.)

[38] 「(利子生み資本。生産の運動との関係における既存の富。)

(産業資本との関係における利子生み資本と商業資本。より古い諸形態。派生的な諸形態。)

(資本主義的生産の土台の上での利子生み資本の発展。)(高利。ルター等々。)(『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.4, S. 1206. 『資本論草稿集』⑦, 4ページ。)

[39] 前出の引用注 [32] を見よ。

[40] 「資本の量が増加するとき、かりに資本の価値が——すなわち資本の利子が、すなわち資本の支配し取得する剰余労働が——減少しないならば、利子は複利によって幾何級数的に累進することになる。そして、これを貨幣で計算してみればありえないような蓄積 (蓄積率) を前提することになる (プライスを見よ) のとまったく同様に、その真の要素に分解してみれば、たんに剰余労働だけではなく必要労働までも、労働を資本に「帰属すべきもの」として飲みこむことになるの

である。(プライスの幻想には、収入とその諸源泉とに関する項目〔Abschnitt〕のなかで立ち返ること。)(『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.4, S. 1372. 『資本論草稿集』⑦, 291 ページ。)

- [41] 「貸し手が資本家に要求するものは一般的利潤率(平均)を基準にして計算されているのであって、それからの彼の個人的な偏倚を基準にしてではない。平均がここでは前提となる。利子率そのものは変化するが、しかし、すべての借り手にとってである。」(『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.4, S. 1461. 『資本論草稿集』⑦, 418-419 ページ。)
- [42] 「これに反して、貨幣資本の場合には——貨幣市場では——ただ買い手と売り手という、需要と供給という、二つの種類のものが相対しているだけである。一方の側には借りる資本家階級があり、他方の側には貸し付ける資本家階級がある。商品は同じ形態——貨幣という形態——をとっている。資本がそれぞれ特殊的生産部面または流通部面で投下されるのに応じて取るすべての特殊的な姿態は、ここでは消えてしまっている。資本は、ここでは、自立的な交換価値の、貨幣の、無差別な、自分自身と同一な姿態で存在する。特殊的諸部面の競争はここではなくなる。すべての部面が貨幣の貸し手としてみなひとつとめにされており、また資本も、すべての部面にたいして、その充用の形態にはまだかかわりのない形態で相対している。資本はここでは、生産資本がただ特殊的諸部面のあいだの運動と競争とのなかでだけ現われるところのものとして、諸階級の共同的な資本として、現実に、重みに従って、資本への需要のなかで現われる。他方、貨幣資本(貨幣市場での資本)は現実には次のような姿態をもっている。すなわち、その姿態で貨幣資本は共同的な要素として、その特殊的な充用にはかかわりなしに、それぞれの特殊的部面の生産上の要求に応じていろいろな部面のあいだに、資本家階級のあいだに、配分される。そのうえに、大工業の発展につれてますます貨幣資本は、それが市場に現われるかぎりでは、個別資本家、すなわち市場にある資本のあれこれの断

片の所有者によって代表されるのではなくて、集中され〔concentrirt〕組織されて、現実の生産とはまったく違った仕方で、資本を代表する銀行業者の統制〔のもとに〕現われる。したがって、需要の形態から見れば、この資本には一階級の重みが相対しており、同様に供給から見ても、この資本は、大量にまとまった〔en masse〕貸付可能な資本として、わずかばかりの貯水池に集中された〔concentrirt〕社会の貸付可能な資本として、現われる。」（『1861-1863年草稿』。MEGA<sup>®</sup> II/3.4, S. 1462-1463. 『資本論草稿集』⑦, 420-421 ページ。）

[43] 前出の引用注〔3〕を見よ。

[44] 「一般的利潤率には、当然、一般的利子率に対応する。これを詳細に展開することをここで意図しているわけではない、というのは利子生み資本の分析はこの一般的な項目〔Abschnitt〕ではなくて信用に関する項目〔Abschnitt〕に属するのだからである。」（『1861-1863年草稿』。MEGA<sup>®</sup> II/3.4, S. 1460. 『資本論草稿集』⑦, 417 ページ。）

[45] 「ここは、貸付可能な資本にたいする利子率もつ、一般的利潤率のより捉えにくい形態とに対する、またそれと区別される、このようなより大きい固定性と一様性とはどこから生じるのか、ということを論じるべき場所ではない。そのような論述は信用の項目〔Abschnitt〕に属する。」（『1861-1863年草稿』。MEGA<sup>®</sup> II/3.4, S. 1461-1462. 『資本論草稿集』⑦, 419 ページ。）

[46] 「利潤率が与えられていれば、利子率の相対的な高さは、利潤が利子と産業利潤とに分かれる割合によって定まる。この分割の割合が与えられていれば、利子率の絶対的な高さ（すなわち資本にたいする利子の割合）は利潤率によって定まる。この分割の割合がどのように規定されるのかということは、ここでは研究することはできない。それは資本の、すなわち諸資本の、実在的な運動の考察に属することである。それに対して、われわれがここで取り上げているのは資本の一般的な諸形態なのである。」（『1861-1863年草稿』。MEGA<sup>®</sup> II/3.4, S.

1470. 『資本論草稿集』⑦, 433-434 ページ。)

- [47] 「これまでわれわれは主として信用制度の発展を {そしてそれに含まれている資本所有の潜在的な止揚を}, 主として生産的資本に関連させて考察してきた。いまわれわれは, 利子生み資本そのもの (信用制度による利子生み資本への影響, ならびに利子生み資本が取る形態) の考察に移るが, そのさい総じて, なお若干のとくに経済学的な論評を行なわなければならない。」(『資本論』第3部第1稿。MEGA® II/4.2, S. 504-505. 拙稿「資本主義的生産における信用の役割」の草稿について, 『経済志林』第52巻第3・4号, (43)-(44) ページ。[MEW, Bd. 25, S. 457.] )
- [48] 「交換それ事態が相互に独立した二つの行為に分裂するように, 交換の全運動それ自体が交換者たちから, 商品の交換者たちから分離する。交換のための交換が, 諸商品のための交換から分離する。商人身分が生産者のあいだに現われるが, この身分は, 売るためにだけ買い, そしてふたたび買うためにだけ売るのであって, こうした営みにあたっては諸生産物としての諸商品の所持を目的とせず, ただ交換価値そのものを, 貨幣を取得することだけを目的としている。…… (続いてまた, 本来の商業 [Handel] から貨幣取扱業 [Geldgeschäft] が分離する。)」(『経済学批判要綱』。MEGA® II/1.1, S. 82-83. 『資本論草稿集』①, 123-124 ページ。)
- [49] 「交換価値は, すべての特殊的商品と並んで, 一般的商品として貨幣のかたちで現われるが, それと同様に, そのことによって同時に交換価値は, すべての他の商品と並んで特殊的商品として貨幣のかたちで (というのは, 貨幣は一つの特異的存在をもつから) 現われる。…… (現実の商業 [Handel] から貨幣取扱業 [Geldgeschäft] が分離することによって, 貨幣の特異的本性がふたたび現われる。)」(『経済学批判要綱』。MEGA® II/1.1, S. 84-85. 『資本論草稿集』①, 126-127 ページ。)

- [50] 「流通の費用は運動費用に帰着する。すなわち、生産物を市場にもたらず費用、ある状態から他の状態への転換を生じさせるのに必要な労働時間、本来はすべて計算操作とこれに費やされる時間とに帰着する労働時間（これはある種の特殊的・技術的な貨幣取扱業務〔Geldgeschäft〕の根拠となる）。(後者の費用を剰余価値からの控除とみなすべきかどうかは、のちに明らかとなるであろう。)」(『経済学批判要綱』。MEGA® II/1.2, S. 506. 『資本論草稿集』②, 357 ページ。)
- [51] 「つまり、流通費用それ自体は、すなわち、交換の操作によって、また一連の交換操作によって引き起こされる、労働時間あるいは対象化された労働時間の、つまり価値の消費は、生産に用いられた時間からの、または生産によって生み出された価値からの控除なのである。それはけっして価値を増加させることができない。それは生産上の空費に属し、そしてこの生産上の空費は、資本にもとづく生産の内在的費用に属する。商業〔Kaufmannsgeschäft〕は、またそれ以上に本来的な貨幣取扱業〔Geldgeschäft〕は、それらが流通それ自体の諸操作、したがってたとえば価格の決定（価値を尺度することと価値を計算すること）以外にはなにもせず、総じてこの交換操作を、分業によって自立化した一機能として営み、資本の総過程のこの機能を表わすかぎりでは、たんに資本の生産上の空費を表わすにすぎない。それらは、この空費を減少させるかぎりでは、生産に寄与するが、これは、それらが価値をつくり出すことによってではなく、つくりだされた価値の否定を減少させることによってである。それらが純粹にこのような機能として作用するとしても、それらは、依然として生産上の空費の最小限を表わすだけである。それらが生産者たちに、この分業がなかった場合に彼らがつくり出すことができたであろうよりも多くの価値をつくり出す能力を与え、しかもその程度が、この機能への支払の後に剰余を残すほどであるならば、それらは事実上、生産を増大させたわけである。しかし、この場合に価値が増大したのは、流通諸操作

が価値をつくりだしたからではなく、これらの操作が、そうでない場合にそれらが吸収したであろうよりも少ない価値しか吸収しなかったからなのである。だが、流通操作は資本の生産にとっての必要条件である。」（『経済学批判要綱』。MEGA® II/1.2, S. 518-519. 『資本論草稿集』②, 378-379 ページ。）

- [52] 「最後に、蓄蔵貨幣は、それが鑄貨の準備金や支払手段や世界貨幣として機能しないかぎり、蓄蔵貨幣そのものであり、商品がその第1の変態で凝固され独立化され保蔵されたものであった。しかし、資本にとっては、それは、利用されないままでいる資本——貨幣の形態で利用されないままであって、自分自身の営業のなかで直接に価値を増殖させることのできない資本部分——である。貨幣蓄蔵者の幻想を共有しない資本家にとっては、また貨幣が価値をもつのは商品の絶対的形態としてではなく資本の——自己増殖し機能しつつある価値の——絶対的形態としてだけであるような資本家にとっては、資本のこの利用されないままでいる形態は不生産的資本であり、もし彼自身では利潤を生み出す資本としてそれを役だてるつもりがないとしても、少なくとも利子生み資本に転化されるべき貸付可能な資本である。したがって、彼にとっては、それは、貨幣資本として市場にある貨幣なのである。それは、新たに蓄積される利潤、すなわち資本に転化される利潤であることができる。ところが、このような利用されないままでいる資本の一部分は、地代またはその他の、不生産的労働者の（生産的労働者でさえもの）所得源泉からも流れ出ることができるのであり、こうした労働者は貨幣の形で手もとにある自分たちの収入の一部分を、資本として売ろうとする、すなわち貸し出そうとするのである。」（『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.5, S. 1576. 『資本論草稿集』⑧, 56 ページ。）

- [53] 「最後に、遊休している貨幣——すなわち市場に貨幣資本として投じられている貨幣は、貸し付けられ、また他人から借りられるのであ

て、このことが、またしても——いろいろな形態（貸付、手形割引など）で貨幣取扱業の特別の機能として現われるのであるが、この貨幣取扱業は、商人が諸商品に相対するのと同じで、そんなふうに同時に貸付可能な資本に相対し、需要と供給とを貨幣資本によって調整し集中する〔centralisiren〕媒介者である。」（『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.5, S. 1578. 『資本論草稿集』⑧, 59 ページ。）

- [54] 「さらに、われわれが個々の資本の再生産過程を考察するならば、実現された剰余価値は貨幣の形態で還流する。利潤は一部は収入として支出されるが、一部は資本に再転化されなくてはならない。再生産過程は単純な再生産過程であるだけでなく、蓄積過程、拡大された規模での再生産である。後者は一部は貨幣蓄積として現われる。個々の資本家が貨幣の形態で存在する自分の利潤をただちに資本に再転化させることができるかどうか、すなわちこの利潤を自分の再生産過程のなかで使用することができるかどうかは、1. 市場の状態にかかっており、この市場の状態はおそらくある特定の業務の拡大を即座に可能とするものではない、2. しかし、自分の生産資本の有機的構成にもかかっている。というのは、どんな〔貨幣〕額でもただちに生産資本に転化されるのではなく、こうしたことは一部は技術的な諸条件によって左右され（私は、工場を拡大するのに足りる貨幣をもつことはできても、新たな一工場を追加するのに足りる貨幣をもつことはできない）、一部は、その額が、可変資本と不変資本とをそれらに対応する割合で配分するのに足りる大きさでなければならないということによって左右されるからである。こうしたことが可能でなければ、そのあいだ、貨幣は遊休蓄積貨幣であり——いまでは遊休資本である。貨幣の保管は貨幣取扱業者の仕事になる。これは貨幣取扱業者の一つの操作であり、この操作は、資本主義的蓄積過程の一契機から生じるものであって、その契機は、まず第1に貨幣蓄積として現われる（少なくとも部分的にそのようなものとして現われる）。資本家は、貨幣

を自分自身の事業に投下することができないあいだは、この遊休蓄蔵貨幣を利子生み資本として価値増殖し貸し付けようとする。こうしたことを貨幣取扱業者はその階級全体のために行なうのである。貸借も支払や収納と同じように、貨幣取扱業に従事する資本の特殊的機能——資本の再生産過程そのものから生じる機能——になる。以前には蓄蔵貨幣貯水池の集中〔*Concentrirung*〕として現われたものが、今や同時に、資本として貸付可能な貨幣の集中〔*Concentrirung*〕として現われる。」（『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.5, S. 1699-1700. 『資本論草稿集』⑧, 242 ページ。）

- [55] 「同じような事情にあるのは次のような資本家の場合である。すなわち、かなりの金をため込んでいながら、それを貨幣としてではなく、資本として消費しようとする資本家の場合、言い換えれば利子によって生活しようとする資本家の場合である。

すべての生産資本家そのものも、利潤のうち彼らが収入として支出するけれども一度にはなく少しずつ支出する部分に関しては、同じである。この消費ファンド（本来の貨幣準備）は、その中間の期間、資本として貸し付けられることができるし、また、どんな事情のもとでも、ある程度の量の貨幣として蓄積されなければならない。地代収得者についても事情は同じであって、彼は地代のほかに自分の収入のうち利子生み資本としての部分をも食おうとする。すべての不生産的労働者についても同様であって、彼らの収入は一部は資本化され、一部は少しずつ消費されるが、しかし、ある一定の期間がたてばかなり大きな分けまえを受け取ることになる。

こうしたものはすべて、貸付可能な資本として貨幣取扱業者のもとに集中される〔*concentrirt*〕のであり、彼は、そのうえみずから貨幣を貸し付けるし、また、絶えず支払うことができるためには一定のファンドを準備してもっていなければならない。彼の特殊的資本の機能は、ただ、資本の再生産過程（利潤の資本への転化）から出てくる

過程の、また一部は新たに現われる資本が貨幣の形態で現われるような流通の形態から出てくる過程の、独立した形態でしかない。彼はこの階級全体のために貨幣を貸し借りするのであり、むしろこの階級全体の貸し借りを遂行するのである。」(『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.5, S. 1700. 『資本論草稿集』⑧, 243ページ。)

- [56] 「すでに前章で見たように、商人等々の準備金の保管、貨幣の払い出しや受け取りの技術的諸操作、国際的支払（したがってまた地金取引）は、貨幣取扱業者の手に集中される〔concentrirt〕。貨幣取扱業というこの土台のうえで信用制度の他方の側面が発展し、〔それに〕結びついている、——すなわち、貨幣取扱業者の特殊的機能としての、利子生み資本あるいは貨幣資本〔monied Capital〕の管理である。貨幣の貸借が彼らの特殊的業務になる。彼らは貨幣資本の現実の貸し手と借り手とのあいだに媒介者としてはいつてくる。一般的に表現すれば、銀行業者の業務は、一方では、貸付可能な貨幣資本を自分の手中に大規模に集中する〔concentriren〕ことにあり、したがって個々の貸し手に代わって銀行業者がすべての貨幣の貸し手の代表者として再生産的資本家に相対するようになる。彼らは貨幣資本の一般的な管理者としてそれを自分の手中に集中する〔concentriren〕。他方では、彼らは、商業世界全体のために借りるということによって、すべての貸し手に対して借り手を集中する〔concentriren〕。（彼らの利潤は、一般的に言えば、彼らが貸すときの利子よりも低い利子で借りるということにある。）銀行は、一面では貨幣資本の、貸し手の集中〔Centralisation〕を表わし、他面では借り手の集中〔Centralisation〕を表わしているのである。」(『資本論』第3部第1稿。MEGA® II/4.2, S. 471. 抽稿「信用と架空資本」の草稿について(中)、『経済志林』第51巻第3号, 13ページ。[MEW, Bd. 25, S. 415-416.])

- [57] 「貨幣取扱業に従事する資本は、商品取扱業に従事する資本とともに、商業資本の一つの特殊的種類であって、一方は商品資本の発展で

あり、他方は貨幣資本の発展である、すなわち一方は商品としての資本の発展であり、他方は貨幣としての資本の発展なのである。両者はたんに、流通過程のなかにある生産資本の独立した諸形態であり諸存在様式であるにすぎない。商業資本が資本の最初の自由な形態として生産資本よりも前に存在するのと同じように、貨幣取扱業とこれに従事する資本(これには貨幣資本〔*moneyed capital*〕や利子生み資本も含まれる)は、ただ商人資本だけを前提するのであり、それゆえ同じく生産資本に先行する資本の一形態として存在するのである。」(『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.5, S. 1697. 『資本論草稿集』⑧, 239-240ページ。)

- [58] 「だから、二重化が生じるのである(少なくとも外見からすれば)。一面では、商業資本(商品資本)と貨幣資本〔*moneyed Capital*〕とは生産資本の一般的な諸形態規定であり、また、生産資本が商業資本(商品資本)や貨幣資本(貨幣取扱業)として通過する特殊的運動は、生産資本がその再生産過程のなかでこのような二つの形態で行なう特殊的諸機能である。他面では、特殊的諸資本(したがってまた独自の資本家連中)は、商業資本の形態においてであろうと貨幣資本の形態においてであろうと、専門的に活動するのである。それらはまた、生産資本一般の特殊的諸形態として、特殊的諸資本の諸部面、資本の価値増殖の特殊的諸部面にもなるのである。」(『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.5, 1579. 『資本論草稿集』⑧, 61ページ。)
- [59] 「商業資本や貨幣資本〔*moneyed Capital*〕(ここでは貨幣取扱業の意味でのそれ)を、たとえば鉱山業や漁業や農業や製造工業などの資本のような、生産資本の特殊的区分とみなすということ、これ以上のまちがいはほかにない。むしろ、どの生産資本も、それが自分の生産過程の総運動〔に属する〕W\_G\_WまたはG\_W\_Gを通り、この形態において孤立的に考察されるというかぎりでは、商業資本である。実際、その形態が流動資本とみなされているのであり、これが変

態の相対立する諸段階の統一体とみなされているのである。同じく、どの生産資本も、ある段階においては、たとえこれが  $G \rightarrow G'$  として孤立的に考察されるにせよ、またそのかぎりで貨幣としてのその形態で行なう諸機能が、つまりその貨幣諸機能が孤立的に考察されるにせよ、貨幣資本 [*moneyed capital*] なのである。また、一つの特殊的資本種類としての商業資本、すなわち特定の一部面に投じられて特定の一組の資本家たちによって運営される資本の介入によって、また同じく、特殊的資本種類としての貨幣資本、すなわち貨幣取扱業者の資本の介入によって、——生産資本は、一面では商業資本の機能を遂行することや、ある一段階において商業資本として現われることを、まったくやめるし、ちょうど同じように、貨幣資本であることや貨幣資本の機能を遂行することもやめるのである。」(『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.5, 1579.『資本論草稿集』⑧, 60-61 ページ。)

- [60] 「貨幣取扱業の利潤が示している困難と商業資本のそれが示している困難とは同じではない。商業資本の場合に困難が出てくるのは、その利潤が商品の価格への追加によって生じ商品が購買されるときよりも高く売られるということからであり、こうしたことが、生産価格の規定に、結局は労働時間による商品の価値の規定に、矛盾するように見えるからである。これに反し、貨幣取扱業の場合には、商品は直接にはまったく関係がないままであって、貨幣取扱業者の利潤中の他とは比較にならない最大部分は、彼が資本を無償で借りているあいだのその貸し出し利子から成っているか、それとも彼によるその貸し付け利子が彼によるその借り受け利子を越える超過分から成っているのである。それだから、直接に剰余価値そのものの一部分が彼の利潤の源泉として現われるのであり、彼の利潤はたんにこの剰余価値にたいする分けまえとして現われるのである。

この点については信用としての資本に関する項目〔Abschnitt〕ではじめて詳細に立ち入ることができるが、これはここでのわれわれの

課題のなかには含まれていない。」(『1861-1863年草稿』。MEGA<sup>®</sup> II/3.5, S. 1701. 『資本論草稿集』⑧, 244-245 ページ。)

[61] 前出の引用注 [32] を見よ。

[62] 前出の引用注 [59] を見よ。

[63] 「前の章ではなかんずく次のことが明らかにされた。すなわち、剰余価値率は変わらなくても、利潤率はいろいろに変わる(変化する) ことがありえ、上がり下がりすることがありうるということである。本章では、剰余価値率はつねに不変の所与の大きさと前提する。与えられた一国で社会的労働が分かれているすべての生産部面で、労働の搾取度、だからまた剰余価値率、そして労働日の大きさが同一であり、同じ高さであると前提するのである。生産部面が違えば労働の搾取もいろいろに違っているということについては、すでにアダム・スミスが、そのような相違は各種の現実の補償理由または先入見によって認められた補償理由によって平均化されており、したがってまた、ただ外観的な一時的な相違として、一般的な諸関係の研究にとっては計算にはいらないということを詳しく論証している。その他の相違、たとえば労賃の高さの相違は、すでに導入部 [Einleitung] で述べた単純労働と複雑労働との相違にもとづくものであって、それは、いろいろな生産部面の労働者の運命を非常に違ったものにするとはいえ、けっしてこれらのいろいろな部面での労働の搾取度には影響しないのである。最後に、もし、さまざまの生産部面のあいだでの、また同じ国における一個同一の生産部面のなかのさまざまの投資のあいだでさえもの、労賃や労働日の平均化が、したがってまた剰余価値率の平均化が、さまざまに地域的な障害にぶつかってだめになるとしても、それでもこれらの障害は、資本主義的生産が進歩していきすべての経済関係がこの生産様式に従属していくにつれて減少していく。このような摩擦の研究 [Untersuchung] は、労賃に関するそれぞれの特殊研究 [Spezialuntersuchung] にとっては重要だとはいえ、このような摩

擦は資本主義的生産の一般的な研究〔die allgemeine Untersuchung der capitalistischen Production〕にとっては偶然的な非本質的なものとして取り除かれる（無視される）べきものである。このような一般的な研究では、一般にいつでも、現実の諸関係はそれらの概念に一致するということが前提されるのであり、または、同じことであるが、現実の諸関係は、ただそれら自身の一般的な型を表現している（表わしている）かぎりでのみ、述べられるのである。」（『資本論』第3部第1稿。MEGA® II/4.2, S. 212-215. [MEW, Bd. 25, S. 151-152.]）

- [64] 「2）労働力の価値以下への労賃の引下げ。これはこの研究〔Untersuchung〕ではただ経験的事実として挙げておくだけである。なぜならば、それは、じっさい、ここに挙げてよいかもしれない他のいくつかのことと同様に、資本の一般的分析〔die allgemeine Analyse des Capitals〕には関係のないことで、この著作でわれわれが取り扱わない競争等々の叙述に属することだからである。とはいえ、ここに挙げたものは、利潤率の低下への傾向を阻止する最も重要な原因の一つである。」（『資本論』第3部第1稿。MEGA® II/4.2, S. 305. [MEW, Bd. 25, S. 245.]）

- [65] 「生産関係の物象化の叙述や生産当事者たち自身にたいする生産関係の自立化の叙述では、われわれは、もろもろの関連が世界市場、その景気変動、市場価格の運動、信用の期間、産業や商業の循環、繁栄と恐慌等々のさまざまな時期をつうじて生産当事者たちにたいして、圧倒的な、彼ら<sub>を</sub>無意志的に支配する自然法則および盲目的な必然性として現われ、彼らに対立してかかるものとして力をふるう仕方には立ち入らない。なぜ立ち入らないかと言えば、競争等々の現実の運動はわれわれの計画の範囲外にあるものであって、われわれはただ資本主義的生産様式の内的編制を、いわばその理想的平均において叙述し〔die innere Organisation der capitalistischen Produktionsweise, so zu sagen in ihrem idealen Durchschnitt darstellen〕さえすればよ

いの中からである。」(『資本論』第3部第1稿。MEGA® II/4.2, S. 852-853. [MEW, Bd. 25, S. 839.] )

[66] 「すでにみたように、生産過程は、全体として考察すれば、生産過程と流通過程との統一である。このことは、流通過程を再生産過程として考察したさいに(第2部第4章)詳しく論じた。この部で問題になるのは、この「統一」についてあれこれと一般的反省を行なうことではありえない。問題はむしろ、資本の過程から——それが全体として考察されたときに——生じてくる具体的諸形態を見つけだして叙述することである。{諸資本の現実的運動においては、諸資本は次のような具体的諸形態で、すなわち、それらにとっては直接的生産過程における資本の姿態[Gestalt]も流通過程における資本の姿態[Gestalt]もただ特殊的諸契機として現われるにすぎない、そのような具体的諸形態で対し合う。だから、われわれがこの部で展開する資本のもろもろの形象化[Gestaltungen]は、それらが社会の表面で、生産当事者たち自身の日常の意識のなかで、そして最後に、さまざまの資本の相互にたいする競争のなかで生じるときの形態に、一步一步近づいていくのである。}」(『資本論』第3部第1稿。MEGA® II/4.2, S. 7. 抽稿「『資本論』第3部第1稿について」、『経済志林』第50巻第2号、106ページ。[MEW, Bd. 25, S. 33.] )

[67] 「本書の第2巻は資本の流通過程(第2部)と総過程の諸形象化〔*Gestaltungen*〕(第3部)とを、最後の第3巻(第4部)は理論の歴史を取り扱うであろう。」(『資本論』第1部第1版、序文。MEGA® II/5, S. 14.)

[68] 「私の事情(身体のためや日常生活のためのはっきりなしの中断)のために、最初にもくろんでいたのとは違って、二つの巻を一度にではなく、まず第1巻を出さなければならないことになりました。それからまた今度はおそらく3巻になるでしょう。

すなわちこの著作の全体は次の部分に分かれます。

第1部 資本の生産過程。

第2部 資本の流過程。

第3部 総過程の形象化〔*Gestaltung*〕。

第4部 理論の歴史のために。

第1巻ははじめの二つの部を含みます。

第3部が第2巻、第4部が第3巻を占めると思います。

第1部ではまた最初から始めること、すなわちドゥンカーから出た私の著作を商品と貨幣とにかんする一つの章に要約することが必要だと考えました。」(1866年10月13日付クーゲルマン宛ての手紙。MEW, Bd. 31, S. 534.)

- [69] 「本書の第2巻は資本の流通（第2部）と資本がその発展の進行中に帯びるさまざまな形態〔*les formes diverses qu'il revêt dans la marche de son développement*〕（第3部）とを取り扱うであろう。最後の第3巻は理論の歴史を述べるであろう。」(『資本論』第1部フランス語版〔ドイツ語版〕第1版序文)。MEGA® II/7, S. 14. 江夏美千穂・上杉聰彦訳『フランス語版資本論』上巻、法政大学出版社、1979年、xii ページ。)
- [70] 「第3部ではわれわれは次に、剰余価値の、そのさまざまな形態と互いに分離した構成諸部分とへの転化のところにやってくる。」(1868年4月30日付エンゲルス宛ての手紙。MEW, Bd. 32, S. 70.)
- [71] 「だから貨幣取扱業は、ここで考察しているような純粹の形態では、すなわち信用制度から切り離されたものとしては、ただ、商品流通の一契機の、すなわち貨幣流通の技術と、そこから生じる貨幣のさまざまな機能とに関係があるだけである。」(『資本論』第3部第1稿。MEGA® II/4.2, S. 393. 抽稿「貨幣取扱資本」の草稿について、『経済志林』第50巻第3・4号、(302)-(303)ページ。(MEW, Bd. 25, S. 334.))
- [72] 「貸借の機能や信用取引が貨幣取扱業のそのほかの機能と結びつい

たとき、貨幣取扱業は完全に発展しているわけである {といっても、これはすでに貨幣取扱業の発端からあったことではあるが}。しかし、これについてはあとではじめて [論じる]。というのは、われわれは次章ではじめて利子生み資本を展開するのだからである。」(『資本論』第3部第1稿。MEGA<sup>®</sup> II/4.2, S. 391. 抽稿「貨幣取扱資本」の草稿について, 『経済志林』第50巻第3・4号, (297)ページ。[MEW, Bd. 25, S. 332.] )

[73] 「最後に国内商業なり外国貿易なりのための購買手段ないし支払手段の準備ファンドとしての蓄蔵貨幣の形成について言えば、それがただ流通過程の必然的な沈澱物でしかないのは、さしあたり遊休している資本のたんなる形態であるかぎりでの蓄蔵貨幣形成がそうであるのとまったく同様である。」(『資本論』第3部第1稿。MEGA<sup>®</sup> II/4.2, S. 392. 抽稿「貨幣取扱資本」の草稿について, 『経済志林』第50巻第3・4号, (299)ページ。[MEW, Bd. 25, S. 333.] )

[74] 「この§の対象(ならびに、のちに、信用について言うべきすべてのこと)は、ここではけっして、細目にわたって取り扱うことはできない。明らかなのは、1) 貸し手と借り手とのあいだの競争およびその結果としての貨幣市場の短期的変動は、われわれの考察の範囲外にあるということ、2) 産業循環のあいだに利子率を通る円環 [Cirkel] は、それを叙述するためにはこの [産業] 循環 [cycle] の叙述を前提するのであるが、これもまた同じくここではすることができないということ、3) 世界市場での利子の大きなり小なりの大きな均等化等々も、同様であるということである。われわれがここでしなければならぬのは、ただ、一方で利子生み資本の姿態を展開することと、〔他方で〕利潤にたいする利子の自立化を展開することだけである。」(『資本論』第3部第1稿。MEGA<sup>®</sup> II/4.2, S. 431. 抽稿「利潤の分割」の草稿について, 『経済志林』第56巻第4号, 5ページ。[MEW, Bd. 25, S. 370.] )

(75) 「貨幣市場ではただ貸し手と借り手とが相対するだけである。商品は同じ形態を、すなわち貨幣という形態をとっている。資本がそれぞれ特殊の生産部面または流通部面で投下されるのに応じて取るすべての特殊な姿態は、ここでは消えてしまっている。資本は、ここでは、自立的な交換価値の、貨幣の、無差別な、自分自身と同一な姿態で存在する。特殊の諸部面の競争はここではなくなる。すべての部面が貨幣の貸し手としてみなひとまとめにされており、また資本も、すべての部面にたいして、その充用の特定の仕方にはまだかかわりのない形態で相対している。資本はここでは、生産資本がただ特殊の諸部面のあいだの運動と競争とのなかでだけ現われるところのものとして、階級の共同的な資本として、現実には、重みに従って、資本への需要のなかで現われるのである。(?) 他方、貨幣資本(貨幣市場での資本)は現実には次のような姿態をもっている。すなわち、その姿態で貨幣資本は共同的な要素として、その特殊な充用にはかかわりなしに、それぞれの特殊の部面の生産上の要求に応じていろいろな部面のあいだに、資本家階級のあいだに、配分されるのである。そのうえに、大工業の発展につれてますます貨幣資本は、それが市場に現われるかぎりでは、個別資本家、すなわち市場にある資本のあれこれの断片〔Parcel〕の所有者によって代表されるのではなくて、集中され〔concentrirt〕組織されて、現実の生産とはまったく違った仕方では、社会的資本を代表する銀行業者の統制のもとに現われるのである。したがって、需要の形態から見れば、この資本には1階級の重みが相対しており、同様に供給〔Zufuhr〕から見ても、この資本は、大量にまとまった〔en masse〕貸付可能な資本として〔現われる〕のである。」(『資本論』第3部第1稿。MEGA® II/4.2, S. 440-441. 拙稿「利潤の分割」の草稿について、『経済志林』第56巻第4号、31-32ページ。〔MEW, Bd. 25, S. 380-381.〕)

(76) 「経済人たち〔Oekonomen〕が事柄をこのように考えている二三

の個所をここに引用すべきである。第1194号「あなたがた（イングランド銀行）は、資本という商品を取り扱う非常に大きな商人〔very large dealers in the commodity of capital〕ですな？」（銀行法委員会報告、1857年）」（『資本論』第3部第1稿。MEGA® II/4.2, S. 412. 抽稿「利子生み資本」の草稿について、『経済志林』第56巻第3号、23ページ。〔MEW, Bd. 25, 351.〕）

- [77] 「利子はもともと、利潤すなわち剰余価値（資本によって取得された不払労働）のうちの、機能資本家つまり産業資本家または商人が、自分の資本ではなく借りた資本を充用するかぎり、資本の所有者つまり貸し手に支払ってしまわなければならない部分にほかならないものとして現われるのであり、そしてもともとそれにほかならない（また実際にどこまでもそれにほかならない）のである。もし彼が自分の資本だけしか充用しないのであれば、そのような利潤の分割は生じない。利潤はそっくり彼のものである。じっさい、資本の所有者たちが資本を自分で再生産過程で充用するかぎり、彼らは利子率、rate of interestを規定する競争には参加しないのであって、すでにこの点においても、利子の諸範疇——これらはなんらかの利子率の規定なしにはありえない——が生産資本それ自体の運動にとっては外的なものであることが示されているのである。」（『資本論』第3部第1稿。MEGA® II/4.2, S. 441-442. 抽稿「利子と企業者利得」の草稿について、『経済志林』第57巻第1号、64ページ。〔MEW, Bd. 25, S. 383.〕）

- [78] 「資本主義的生産は、それが発展していくのと同じ度合いで市場を拡張し、だからまた、市場の中心点としての生産場所から測ったときにそれが描く市場の円周の半径を累進的に増大させ、その結果として流通時間を延長していくのだから、〔これにたいして〕資本に内在的な価値増殖衝動は、資本に内在的な商品低廉化法則のことはまったく別としても、運輸・通信手段を発達させることによって、つまり、たんに市場の拡張のためばかりでなく、商品が市場を通り抜ける時間の

短縮のための、だからまた流通時間の短縮のためのこの実体的諸条件を創造することによって答えるのである。他方では信用制度であって、他の2点にも妥当することであるが、これは流通時間を短縮し、全再生産過程を流動的に保つための手段として、資本主義的生産から必然的に生まれでてくる〔herauswachsen〕ものである。』（『資本論』第2部第1稿。MEGA® II/4.1, S. 207. 中峯照悦・大谷禎之介他訳『資本の流通過程——『資本論』第2部第1稿——』, 大月書店, 1982年, 87ページ。)

- [79] 「最後に、貨幣そのものが、それが高価な実体からなっているかぎりは、流通費に、しかも流通の大きな費用に属する。国民の年々の労働のうちの一部は、生産手段や消費ファンドに移行しうる諸商品の姿態で現われるかわりに、無駄に金銀の姿態で現われる。貨幣を無価値の代理物で置き換えようとするのは資本主義的生産の傾向である。けれども、生産された富のうちの莫大な部分がそれ自体としては無用なこうした形態を取るということは、システムの必然的諸条件から生じることである。それは、流通過程の諸条件によって必要とされる固定資本なのである。」（『資本論』第2部第1稿。MEGA® II/4.1, S. 230. 前出邦訳『資本の流通過程』, 113ページ。)
- [80] 「最後に、ここではじめて、この衝動を実現する手段が、労働の生産諸力の発展、大量の商品資本を在庫の形態で市場で保存する手段、もろもろの市場そのものの拡大、すべての国民の生産の絡み合い、生産部門のたえざる累増、あらゆる形態での固定資本の発展、ある部面で生みだされた過剰資本を他の部面で機能させること（総じて貯蓄を資本化すること）を容易にするものの形成、これらのことによって、完全に発展するからである。」（『資本論』第2部第1稿。MEGA® II/4.1, S. 358. 前出邦訳『資本の流通過程』, 272ページ。)
- [81] 「まず、現存資本にたいする、あるいは将来の収益にたいする所有権原（国債、等々のような）の集積にすぎないいわゆる貨幣資本につ

いて言えば——いわゆる貨幣市場および貨幣資本の最大の部分をなすのはまさにこれらの有価証券である——、それは実際には、リカードウが国家の債権者の貨幣資本について正しく言っているように、まったく資本ではないのである。この「観念的資本」の形態についてのさらに詳しいことは、利子生み資本のところ（第3部第4章）述べるべきである。」（『資本論』第2部第1稿。MEGA® II/4.1, S. 360. 前出邦訳『資本の流過程』, 274-275 ページ。）

[82] 「いま、固定資本についてもっと詳しく展開されるべきことは……次のことである。……

(3) この2種類の資本〔固定資本と流動資本〕のそれぞれは、どの程度まで、より完全な意味での資本なのか。固定資本がこの生産様式とともに発展すること、資本主義的生産様式に特徴的なこととして〔展開すること〕。信用システム等々の土台としての固定資本、——信用システムがそれ自体〔per se〕つねに将来の労働にたいする指図であるというかぎり。この両種類の資本の神秘化。」（『資本論』第2部第1稿。MEGA® II/4.1, S. 267. 前出邦訳『資本の流過程』, 157 ページ。）

[83] 「国民的富のうちの固定資本から成る部分は——そして、この固定資本がますます固定資本として形象化されてくるにつれて、すなわち、流動資本とのその特徴的な区別をますます形象化し明確にしていくにつれて——、その価値の補填がいよいよ徐々になり、その価値を再生産する期間は、流動資本の再生産期間の尺度である1年をはるかに越えるようになる。それゆえ、流動資本——すなわちその価値実現〔Verwerthung〕——が、より多く、現在の労働——われわれが現在の〔contemporaneous〕労働と呼ぶのはその年のうちになされるすべての労働のことだが——にもとづいているのにたいして、固定資本の価値実現〔Verwerthung〕は、それが、たとえば本来の機械のように、直接に狭義の労働手段として直接的生産過程において機

能するであろうと、建築物、鉄道、運河、等々のように、直接的生産過程から独立した生産過程の一般的諸条件として機能するのであると、はるかに高程度合いで、将来の労働にもとづいている。自己の価値を再生産する（そしてその上さらに、後で明らかになるであろうように、自己の所有者に、他の諸資本が生産した剰余価値からの分け前を保証するはずの）資本としては、固定資本は将来の労働（そしてこの第2の場合には剰余労働）にたいする指図証である。だからこそ、固定資本が発展するにつれて有価証券が増えるのである。この有価証券は、固定資本の価値にたいする、それゆえこの価値の将来の再生産にたいする所有権原を表わすだけでなく、同時に、その将来の価値増殖〔Verwerthung〕にたいする権原、すなわち総資本家階級によってゆすり取られるはずの剰余価値からの分け前（利子、等々）にたいする権原をも表わしている。つまり、この点に信用制度の発展が、同時にしかし、貨幣資本のうち、将来の労働および剰余労働にたいする所有権原の蓄積のほかには何ものも表わしていない部分の発展が、一つの新しい物質的基礎をもつのである。貨幣資本のうちのこの部分の蓄積は、先取りされた将来の富にたいする権原から成っており、だからまた、それ自身はけっして現実に存在する国民的富の要素ではない、言い換えれば、それがそうした要素であるのは、現存する固定資本の現存する価値（価値増殖〔Verwerthung〕ではなくて）にたいする所有権原を表わしているというかぎりではでない。しかし、この権原はつねに、この価値が生産される前から存在しており、直接には、その価値を生産するために支出される、すなわち前貸しされる資本の価値以外の何ものをも代表しない。この場合でも、この価値を、たとえば、鉄道の価値と株主の書類鞆の中にある鉄道株の価値というように、二重に計算してはならない。この点は、国債の場合もまったく同様である。国債は、それがその所持者に分け前を保証している、年々の生産物の価値以外のいかなる価値でもない。しかし、こうした

外観がますます生みだされるのは、国債の時価——その評価の変動——が、その権原の対象である価値とは直接には関わりのない諸事情によって決定されるからである。しかし、資本主義社会〔the capitalist society〕の最有力筋の連中は、蓄積のこうした形態に生産や蓄積の現実の運動を従わせるように努めるのである。」（『資本論』第2部第1稿。MEGA® II/4.1, S. 287-288. 前出邦訳『資本の流通過程』, 181-182 ページ。）

- [84] 「このような不断の不均等の不断の平均化がますます速く行なわれるのは、1. 資本がより可動的な場合であって、そうであればあるほどある部面から他の部面に資本を移動することがそれだけ容易に行なわれるのであり、同時にこれには場所についての可動性も含まれている。2. 労働をある部面から他の部面へ、またある場所の生産地点から他のある場所の生産地点へより速く動かすことができる場合である。第1のことは次のようなことを前提する。社会のなかでの完全な自由取引〔free trade〕。そして、自然的独占以外の、すなわち資本主義的生産様式そのものから生じる独占以外の、あらゆる独占の排除。さらに信用システムの発展であって、信用システムは、組織されていない大量としての浮動している社会的資本を集中して〔concentriren〕個別的資本家たちに向き合わせる。資本家のもとへのさまざまな生産部面の従属（この従属は、すべての資本主義的に搾取される生産部面で価値の生産価格への転化が問題になると仮定したときにすでに前提のうちに含まれていたことである。しかし、この平均化そのものがより大きな障害にぶつかるのは、多数の広大な資本主義的に経営されていない生産部面が資本主義的に経営されている諸部面のあいだに割り込まれ絡み合わされている場合である）。人口の密度がある大きさに達していること。第2の点。労働者が一つの生産部面から他の生産部面に、またはある生産場所からどこか他の生産場所に移動することを妨げるような法律をすべて廃止すること。自分の労働の内容にたい

する労働者の無関心。すべての生産部面の労働ができるだけ単純労働に還元されること。職業的偏見がすっかりなくなること。とくにまた、資本主義的生産様式への労働者の従属、等々。これについてのこれ以上の詳細はわれわれの限界の外部にある。なぜならそれらは「競争について」という論文〔Abhandlung〕で展開されるべきことだからである。」（『資本論』第3部第1稿。MEGA® II/4.2, S. 270. [MEW, Bd. 25, S. 206-207.]）

- [85] 「ちなみに、利潤の量は、その率が下がっても、投下される資本の大きさにつれて増大する。さらに、この小さくなった比率を表している使用価値の分量が増大する。とはいえ、これは同時に資本の集中〔Centralisation〕を条件とする。というのは、今では生産条件が大量の資本の充用を命ずるからである。それは大資本家による小資本家の併呑と後者の「資本剥奪〔Entcapitalisierung〕」を条件とする。これもまた、別の第2の展相〔Potenz〕における生産者からの労働条件の分離にすぎない。（小資本家たちの場合にはむしろまだ自己労働〔が行なわれているのであって〕、資本家の労働は総じて彼の資本の大きさに、すなわち彼が資本家である力能〔Potenz〕に、反比例するのである。かりに求心力と並んで対抗的な諸傾向が絶えず繰り返し集中排他的に〔decentralisierend〕作用していなかったならば、この過程はじきに資本主義的生産に決着をつけてしまうであろう。）生産者からの労働条件のこの分離は資本および本源的蓄積の概念を形成し、次いで資本の蓄積において恒常的な過程として現われ、そしてここで最後に少数の手中への既存の諸資本の集中〔Centralisation〕と多数の人々の資本剥奪（今では収奪はこのように姿を変える）として現われるのである。

資本の本源的蓄積、——それは、労働諸条件の集中〔Centralisation〕を含んでいる。それは、労働諸条件が労働者たちと労働そのものに対立して自立化することである。この自立化の歴史的行為、——

それは、資本生成の歴史的行為である。それは、労働諸条件を資本に転化し、労働を賃労働に転化する歴史的な分離過程である。これと同時に資本主義的生産の基礎が与えられる。

だから、資本そのものの基礎上での資本の蓄積は、資本と賃労働との関係を前提している。それは、対象的富が労働に対立して分離し自立化することをたえず拡大する規模で再生産する。

諸資本の集中〔Concentration〕。小資本の絶滅による大資本の蓄積。牽引。資本剥奪、——それは、資本と労働との中間的結合〔Mittelverbindung〕の解体である。それは、次の過程の、すなわち、労働諸条件を資本に転化させ、次に資本を倍加させ、拡大した規模で再生産し、最後に社会の多くの地点で形成された資本をそれらの所持者から切り離して大資本家の手中に集中していく〔centralisieren〕過程の最後の展相〔Potenz〕かつ形態にすぎない。対立のこの窮極の形態とともに、生産は、疎外された形態においてではあるが、社会的な生産に転化されている。社会的労働、そして現実の労働過程においては生産諸用具の共同性。資本家たちは、この社会的生産を加速させ、したがって同時にまた生産諸力の発展を加速させる、労働過程の機能者としては、彼らが社会に代わって受益を吸い取り、この社会的富の所有者ならびに社会的労働の支配者〔Commandeur〕として膨れあがっていくのと同じ程度で、余計なものになっていく。封建諸侯〔der Feudale〕のもろもろの請求権は、彼らのサービスがブルジョア社会の出現とともに余計なものになっていったのと同じ程度で、たんなる反時代的かつ反目的的な特権に転化し、したがってまたその破滅の道を急いだのであるが、資本家たちは、こうした封建諸侯〔der Feudale〕と同様な目に遭うのである。』（『資本論』第3部第1稿。MEGA® II/4.2, S. 315-316. [MEW, Bd. 25, S. 256.]）

- [86] 「ちなみに、利潤の量は、その率が下がっても、投下される資本の大きさにつれて増大する。さらに、この小さくなった比率を表してい

る使用価値の量が増大する。とはいえ、これは同時に資本の集中〔Centralisation〕を条件とする。というのは、今では生産条件が大量の資本の充用を命ずるからである。それは大資本家による小資本家の併呑と後者の「資本剥奪〔Entcapitalisierung〕」を条件とする。これもまた、別の形態における労働からの労働条件の分離にすぎない。{というのは、小資本家たちの場合にはむしろまだ自己労働〔が行なわれているのであって〕、資本家の労働は総じて彼の資本の大きさに、すなわち彼が資本家である力能〔Potenz〕に、反比例するのである。かりに求心力と並んで、ここでは展開できない、それを麻痺させる諸傾向——これは諸資本の競争の章で論じるべきことである——が絶えず繰り返し集中排他的に〔decentralisierend〕作用していなかったならば、この過程はじきに資本主義的生産に決着をつけてしまうであろう。} 生産者からの労働条件のこの分離は資本および本源的蓄積の概念を形成し、次いで資本の蓄積において恒常的な過程として現われ、そしてここで最後に少数の手中への既存の諸資本の集中〔Centralisation〕と多数の人々の資本剥奪として現われるのである。」(『1861-1863年草稿』。MEGA® II/3.4, S. 1447. 『資本論草稿集』⑦, 397 ページ。)

[87] 「信用制度とそれが自分のためにつくり出す信用貨幣などのような諸用具との分析は、われわれの計画の範囲外にある。ここではただ、資本主義的生産様式一般の特徴づけのために必要なわずかの点をはっきりさせるだけでよい。そのさいわれわれはただ商業信用だけを取り扱う。この信用の発展と公信用の発展との関連は考察しないでおく。」(『資本論』第3部第1稿。MEGA® II/4.2, S. 469. 拙稿「信用と架空資本」の草稿について(中)、『経済志林』第51巻第3号, 4-5 ページ。[MEW, Bd. 25, S. 413.])

[88] [89] 前出の引用注〔47〕を見よ。

[90] 「V. いまわれわれは利潤を、それが実際に与えられたものとして

現われる形態に、すなわち、われわれの前提によれば 16 % に帰着させた。そこで、この利潤の企業利得と利子とへの分裂だ。利子生み資本。信用制度。」(1868 年 4 月 30 日付エンゲルス宛ての手紙。MEW, Bd. 32, S. 74.)

(2000 年 3 月 31 日)